

大道下遺跡(4次) ほか信濃町内遺跡

発掘調査報告書

—— 押型文土器と平安時代の遺跡 ——

信濃町教育委員会
発行



1997

信濃町教育委員会

大道下遺跡(4次) ほか信濃町内遺跡

発掘調査報告書

—— 押型文土器と平安時代の遺跡 ——

1997

信濃町教育委員会

例 言

1. 本書は平成8年度の大道下遺跡、日向林B遺跡など信濃町内における遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、国および県から補助金交付を受けた信濃町教育委員会が、平成8年4月15日から平成9年3月19日にかけて実施した。整理作業は主に12月～3月におこなった。
3. 本書は調査によって確認された遺物とその出土状況を中心に、基礎資料を提示することに重点をおいた。
4. 本書作成に至る分担は、下記のとおりである。

大道下・日向林B・杉久保・上ノ原（駐在所予定地）・上ノ原（町道予定地）

遺物・記録の整理 高橋哲・今井美枝子・万場弘子・長谷川悦子・横山真理子

石器実測・土器拓本 佐藤ユミ子・菅谷澄子・中村由克

図版作成・編集補助 佐藤ユミ子

編集執筆 中村由克

東裏（バスストップ地点）・東裏（個人住宅地点）

遺物整理・遺物実測 佐藤道子・菅谷澄子・竹川弘子・玉井真生・藤田桂子・村田達哉

図版作成・編集補助 藤田桂子

編集執筆 渡辺哲也

5. 調査によって得られた諸資料は、野尻湖ナウマンゾウ博物館で保管している。出土資料の注記番号は、次のとおりである。

大道下遺跡	96OM-C	日向林B遺跡	96HB
東裏遺跡（バスストップ地点）	96HU	東裏遺跡（個人住宅地点）	96HU北

目 次

例言

I 調査の経過	1	2. 上ノ原遺跡（駐在所予定地）	52
1. 8年度信濃町発掘調査の概要	1	3. 上ノ原遺跡（町道予定地）	52
2. 調査体制	1	V まとめ	54
II 大道下遺跡	3	引用・参考文献	54
1. 発掘の概要と経過	3	図版	55
2. 発掘地の地形と地質	3	VI 東裏遺跡（バスストップ地点）	75
3. 遺構・遺物の出土状況	3	1. 調査に至る経緯	75
4. 縄文時代の土器集中区	22	2. 調査日誌抄	75
1) 遺物の分布	22	3. 調査の方法	75
2) 縄文土器	22	4. 発掘地の地形と層序	76
3) 石器	32	5. 遺物の出土状況	76
5. 平安時代の住居址	38	6. 出土遺物	76
1) 遺構	38	7. まとめ	80
2) 平安時代の遺物	38	VII 東裏遺跡（個人住宅地点）	81
6. 弥生時代、その他の遺物	47	1. 調査に至る経緯	81
7. 大道下遺跡第4次調査の成果	47	2. 調査日誌抄	81
III 日向林B遺跡	49	3. 調査の方法	81
1. 発掘の概要と経過	49	4. 発掘地の地形と層序	81
2. 発掘地の地形・地質と遺物の出土状況	49	5. 遺構と遺物の出土状況	82
3. 出土遺物	49	6. 出土遺物	82
4. 成果	49	7. まとめ	87
IV 町内における試掘調査	52	図版	88
1. 杉久保遺跡	52	報告書抄録	89

I 調査の経過

1. 8年度信濃町発掘調査の概要

平成8年度、信濃町教育委員会では、高遠道関連の公共事業や民間事業が相次いだため、埋蔵文化財の発掘調査が多く実施された。本年度は、4月初より2班体制で、4月から12月まで現場調査が実施され、引き続き3月まで整理作業をおこなった。今年度におこなった主な発掘調査は、表1のとおりである。

この内、個人住宅建設にともなう発掘調査である日向林B遺跡・杉久保遺跡・東裏遺跡と、開発事業の試掘調査である大道下遺跡・上ノ原遺跡・東裏遺跡の調査には、国および県からの補助金交付を受けた。

2. 調査体制

大道下遺跡等の発掘調査は、信濃町教育委員会の直営事業として実施し、組織は以下のとおりである。

調査主体者 信濃町教育委員会
 教育長 片山 幹成 (10月以前)
 小林 一盛 (10月以降)
 事務局 総務教育課 課長 北村 教博
 係長 松木 武夫
 担当 高橋 哲

〈大道下・日向林B・杉久保・上ノ原〉

調査担当者 中村 由克

担当職員 高橋 哲

調査参加者 池田か己子、石田 和子、大久保孝子、

荻原 敬蔵、小日向キヨ子、片山 トヨ、金子シズイ、

金子 房江、黒田 敏夫、木下 浩一、木下 絹榮、

木村キミ子、小坂橋みつ江、小林 初子、小林 昌子、

小林 正義、駒村 幸男、酒井 千代、佐藤 清子、

佐藤 晋一、佐藤ユキ子、佐藤 儀信、佐藤 幸人、

渋谷ユキ子、高橋 是清、高野 孝司、竹内 功、

竹内 智美、竹内 良子、竹内 晴江、竹内 百枝、

表1 平成8年度における信濃町教育委員会の発掘調査一覧

No.	遺跡名	原 因	遺跡の時代	面 積	調査期間	出土遺物点数	主な出土品
1	上ノ原	県道信濃橋川新橋	旧石器・縄文	約3,400㎡	4/19～ 12/10	8,974点	旧石器時代約2.5万年前のナイフ形石器と約1.5万年前の石器群が大量に出土。 縄文文化約1.3万年前の石核接合資料を発見。
2	大久保南	県道信濃橋川新橋	旧石器	約500㎡	5/11～ 7/15	82点	縄文時代早期約8千年前の土器、平安時代住居址4軒。土師器出土。
3	大道下	埋立て用地拡張	縄文・平安	10,061㎡	4/11～ 7/31	10,322点	縄文時代早期約8千年前の土器、平安時代住居址4軒。土師器出土。
4	西岡B	移動電話アンテナ	旧石器	516㎡	7/11～ 8/2	37点	黒色帯 (約2.9～2.7万年前) の石器 (剣片、石核、磨石) 出土。
5	貫ノ木	市道石橋パルプ基地	旧石器	約3,400㎡	12/4,5	0点	試掘をおこない、遺跡の範囲外であることを確認。
6	七ツ葉	町道普光田線	旧石器・縄文・平安	約400㎡	9/17～ 10/23	604点	旧石器時代のナイフ形石器、礫器、縄文時代の炭石が出土。
7	杉久保	個人住宅	旧石器・縄文・平安	約340㎡	9/21～ 9/23	0点	試掘をおこない、遺物は確認できなかった。
8	日向林B	個人住宅	縄文・平安	103㎡	10/16～ 10/25	77点	縄文時代前期の土器、石器、平安時代の土器出土。
9	上ノ原	町道大平大久保線	旧石器	1,100㎡ (試掘)	11/27～ 11/29	2点	試掘をおこない、剣片が出土。遺跡の範囲内であることを確認。
10	上ノ原	駐在所建設用地	旧石器	621㎡ (試掘)	11/26,27	0点	試掘をおこない、遺物は確認できなかった。
11	山根	広城森道	弥生	約1,000㎡	4/18～ 6/5	3,672点	弥生時代中期の掘穴住居跡が1軒みつかる。
12	吹野原A	広城森道	旧石器・縄文 (早)	約700㎡	9/11～ 11/29	1,407点	旧石器時代の3時期の遺物が出土。
13	東裏	町道役場大久保線	旧石器・縄文・平安	約1,000㎡	5/28～ 10/29	約1,300点	平安時代の遺物多数出土。灰陶器の広口瓶など。
14	東裏	町道バスタープ・バスタープ駐車場	旧石器・縄文・中近世	約1,500㎡	7/25～ 10/29	約60点	旧石器、縄文時代の剣片1点。ほか陶磁器片など。
15	東裏	個人住宅	近世	約150㎡	7/23～ 8/5	194点	江戸時代後期の鍛冶屋に關する資料。(ふいごの部品など)
16	上ノ原	高遠道路舗装プラント	旧石器	470㎡	9/25～ 9/30	0点	旧石器の遺物出土が予想されたが出土しなかった。
17	菅川A	下水道浄化センター	縄文 (中)	1,102㎡ (試掘)	11/1	0点	貝塚があることが予想されたが出土しなかった。
18	西岡A	水生植物園	旧石器	約15,000㎡ (試掘)	11/18～ 11/28	0点	旧石器の遺物出土が予想されたが出土しなかった。

竹内ゆき子、中村 昭子、中村 貞子、中村 浪江、
中村フサ子、東 寅、平塚 節子、深沢 政雄、
藤原伊久栄、松岡さとみ、松木 由美、松沢 友二、
宮川あさ子、山田 啓子、吉川 栄子、今井美枝子、
佐藤エミ子、長谷川悦子、横山真理子、万場 弘美
(東表遺跡)

調査担当者 渡辺 哲也

調査参加者 荒井 時子、池田 長昭、石田 尊子、
小日向キヨ、加納ゆづる、北村 栄子、小林ヨシエ、
関塚 恒、滝野 一男、玉井 真生、外谷 朝生、
中村 正枝、中村リウ子、藤田 桂子、村田 達哉、
森 浩美、若月ヶサノ、若月 知子、若月 三雄

なお、調査期間中および報告書作成にあたって、次の事項について、以下の方々にご指導・ご援助をいただいた。ここにご芳名を記し、感謝の意を表する次第である(敬称略)。

調査：長野県教育委員会文化財保護課、市村勝己、
縄文土器：小笠原水隆(千葉県文化財センター)

綿田 弘実(長野県縄文センター)

中沢 道彦(長野県教育委員会)

賢田 明(長野県埋文センター)

近藤 尚義(同上)



図1 野尻湖周辺における平成8年度(1996)発掘の遺跡

旧石器時代の遺跡：

1 立が鼻 2 琵琶島 3 樺ヶ崎 4 杉久保
5 川久保 6 小丸山 7 向新田 8 清明台
9 神町 10 神山北 11 海端 12 狐久保
13 砂間 14 神山A 15 神山C 16 照月台
17 貫ノ木 18 西岡A 19 西岡B
20 嘴越A 21 大久保南 22 上ノ原
23 緑ヶ丘 24 小丸山公園 25 東表 26 伊勢見山
27 裏の山 28 大平B 29 大平A
30 日向林B 31 セツ栗 32 柳原 33 陣場
34 清水東 35 吹野原A 36 吹野原B
37 丸谷地 38 大道下 39 星光山荘B

1996年の発掘：

A 杉久保 B 神町(調査団) C 立が鼻(調査団)
D 貫ノ木 E 西岡A F 西岡B
G 上ノ原(町道) H 上ノ原 I 大久保南
J 東表(バスストップ地点予定地)
K 上ノ原(県道) L 東表(町道) M 上ノ原(駐在所予定地)
N 東表(個人住宅) O セツ栗 P 日向林B(個人住宅)
Q 吹ノ原A R 山根 S 大道下

II 大道下遺跡

1. 発掘の概要と経過

大道下遺跡は信濃町の富士里地区の大字穂波の北部に所在する。国道18号線にそった斜面から谷地にわたる場所であり、隣接して平成元年度に町道落合公園線の開設、平成2年度に東側の上越商会コンクリート工場の開設、平成3年度に畑地の埋立て事業などで発掘調査がおこなわれている。

この遺跡は、国道西側の湧水地を中心にそのまわりの丘陵地にひろがるおもに縄文時代早期と平安時代の遺跡であり、一部には旧石器時代のブロックも確認されている。

平成8年3月、遺跡に隣接した湧水地から流れ出る谷地の部分に国道バイパス工事ともなう残土を使って、埋立てをおこなう計画があることを町建設課から連絡があった。埋め立て予定地が谷底からかなり急な斜面であったので、遺跡に隣接するか、地形からは遺跡に含まれるかどうか不明であったので、試掘調査をおこなうこととなった。

調査は4月11日に着手して7月31日までおこなわれた。

2. 発掘地の地形と地質

発掘地は南北にはる国道18号線のすぐ西側にのぞ

む谷地であり、682mから698mまでの約16mの標高差がある。この南端には小さな池があり、そこから北西方向に小川が流れ出ている。遺物が出土したのは、おもに国道直下の斜面と小川にそった低地部である。

鍋山からつづくこの付近のやや起伏のある丘陵状の山地は、鮮新世～更新世前期の堆積岩からなる基盤の上に、信濃町ローム層以上のローム層が厚く堆積している。

発掘地の斜面部では柏原黒色火山灰層が風成で、谷の低部では、粘性を帯びた層相を示す。

3. 遺構・遺物の出土状況

大道下遺跡第4次調査では、10,061㎡の埋め立て予定地の中から10,322点の遺物が出土した。これらは縄文時代と平安時代のものであり、一部に弥生時代と近世の遺物も含まれていた。

縄文時代の遺物は、谷底のC区とB区の谷側に包含されていた。いづれも土器・石器のみが散布する状態であったが、とくにC区では遺物が集中していた。

平安時代の遺物は、国道直下の斜面上部にあたる場所に、1号・2号・3号の3軒の住居址、さらにC区に4号住居址があり、遺物はその付近に集中していた。さらに、斜面のB区には土器が多く散布していた。

表2 大道下遺跡(第4次)の出土遺物点数

(点)

	A区	B区	C区	D区	その他	計
縄文土器	2	112	2,187	90	14	2,405
土器(平安)	1,543	3,211	986	1,201	321	7,262
石器	4	44	122	11	5	186
礎	32	163	161	70	9	435
近世陶磁器など	3	21	2	17	1	44
計	1,584	3,551	3,458	1,389	350	10,322



図2 大道下遺跡(960M)と周辺の地形図

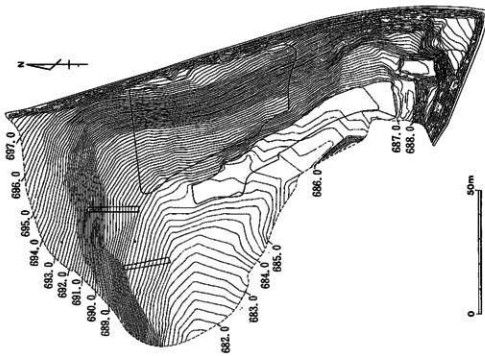


図3 大道下道跡(第4次)調査地域

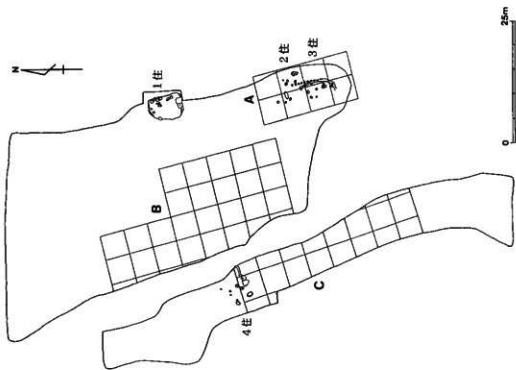


図4 大道下道跡(第4次)の調査区と道跡

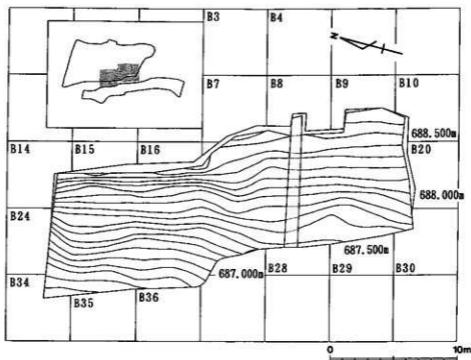


図5 大道下遺跡（第4次）B区の地形

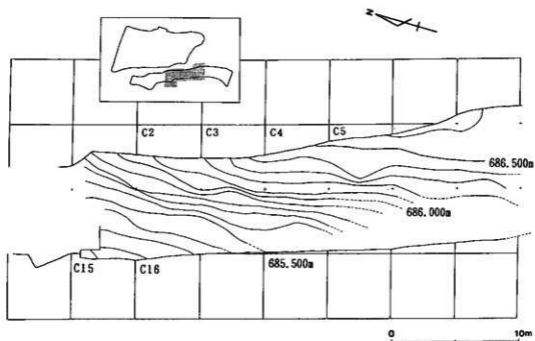


図6 大道下遺跡（第4次）C区の地形

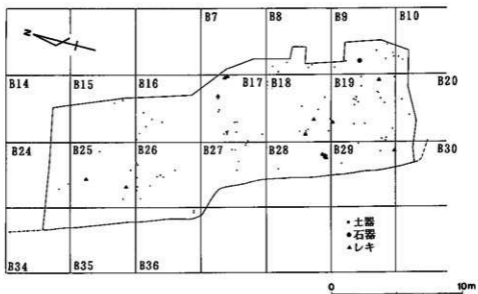
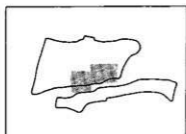


図7 大道下遺跡（第4次）B区の縄文時代遺物の分布

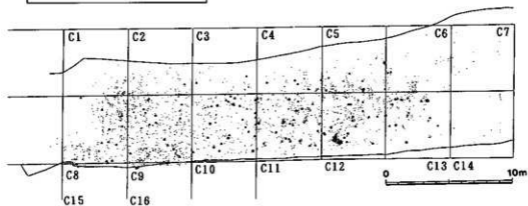
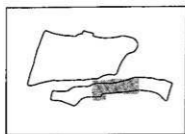


図8 大道下遺跡（第4次）C区の縄文時代遺物の分布

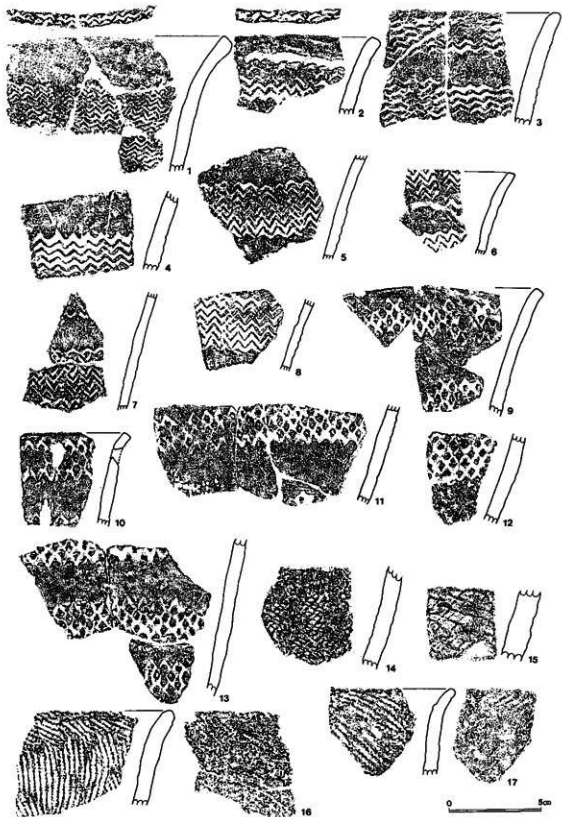


図9 大連下道跡(第4次)出土の縄文土器1
 早期押型土器 山形文(1-8)、栴門文(9-13)、格子目文(14-15)、表裏縄文土器(16-17)

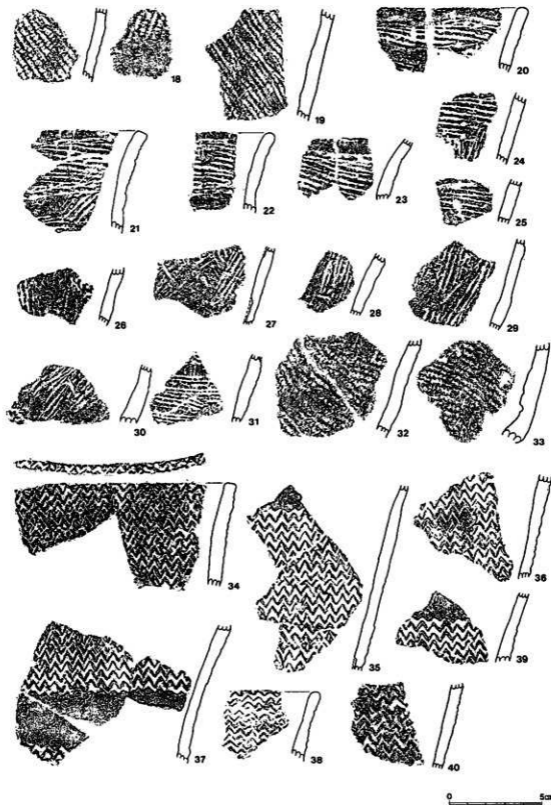


図10 大遺下遺跡(第4次)出土の縄文土器2
 早期表裏縄文土器(18-19)、燃糸文(20-31)、縄文(32-33)、押型文土器山形文(34-40)

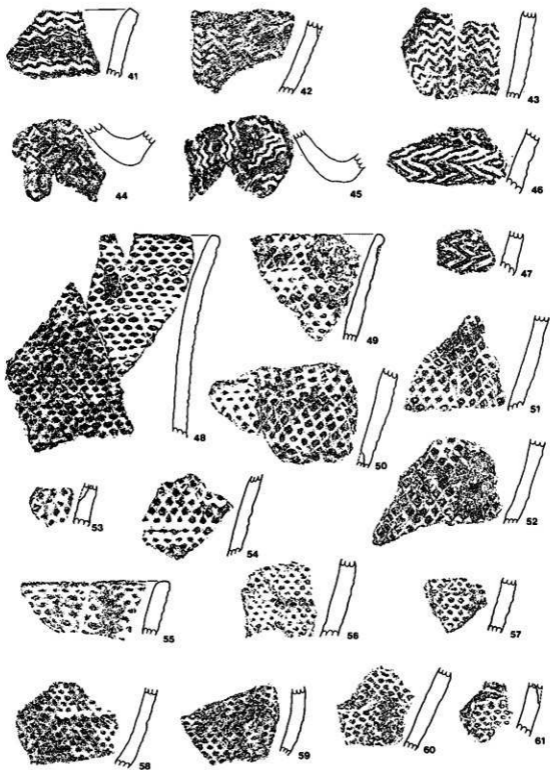


図11 大道下遺跡（第4次）出土の縄文土器 3 早期押型文土器 山形文（41-47）、楕円文（48-61）

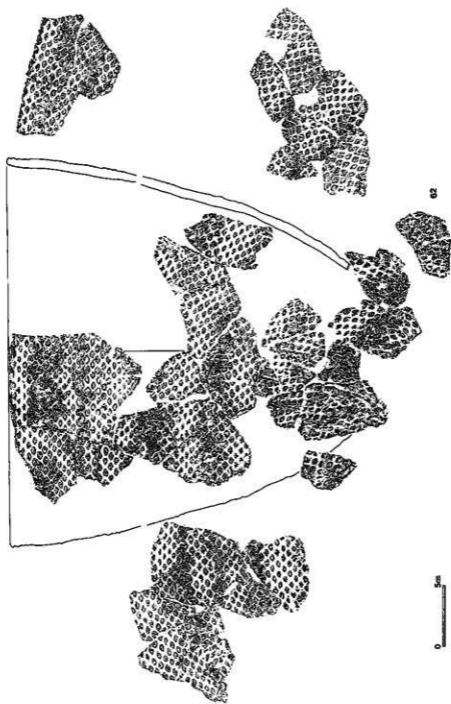


図12 大道下遺跡（第4次）出土の縄文土器4 早期押型文土器 格円文（62）

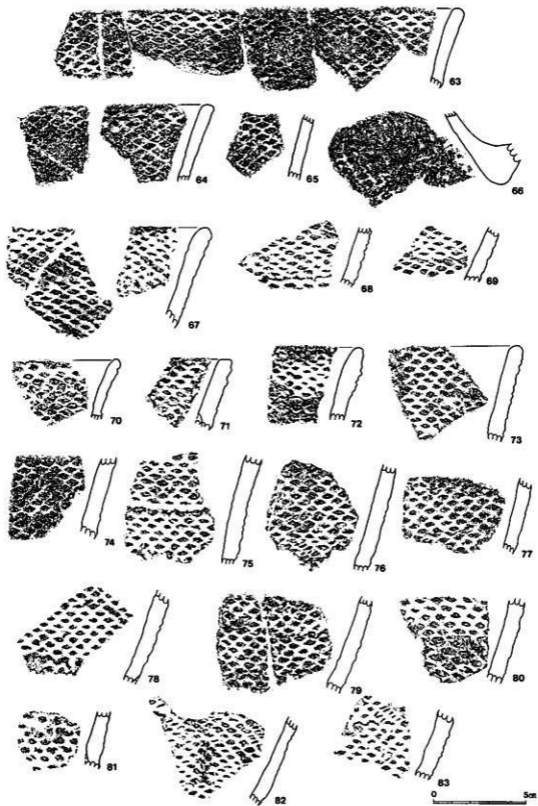


図13 大道下遺跡（第4次）出土の縄文土器5 早期押型文土器 横四文（63-83）

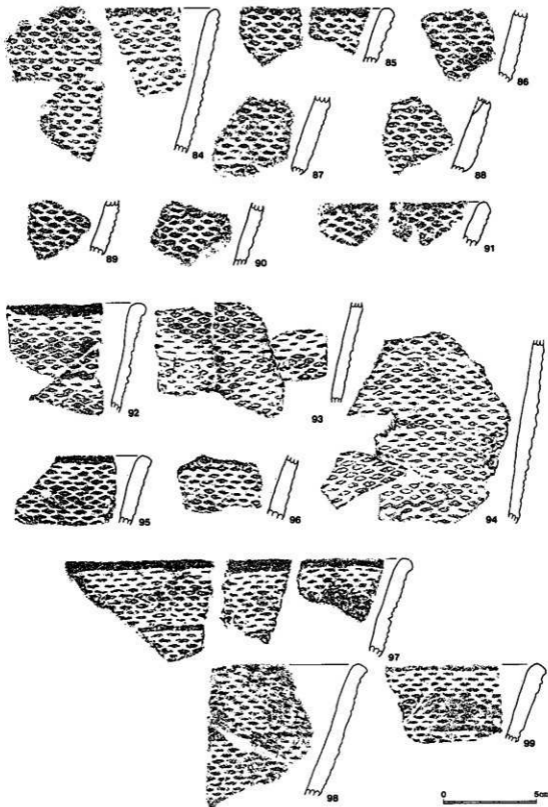


図14 大道下遺跡（第4次）出土の縄文土器6 早期押型文土器 楕円文（84—99）

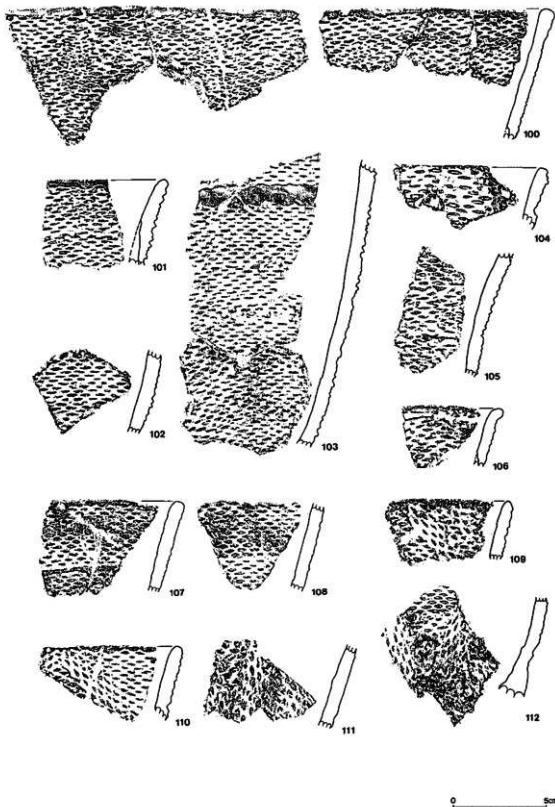


図15 大道下遺跡（第4次）出土の縄文土器 7 早期押型文土器 楕円文（100-112）

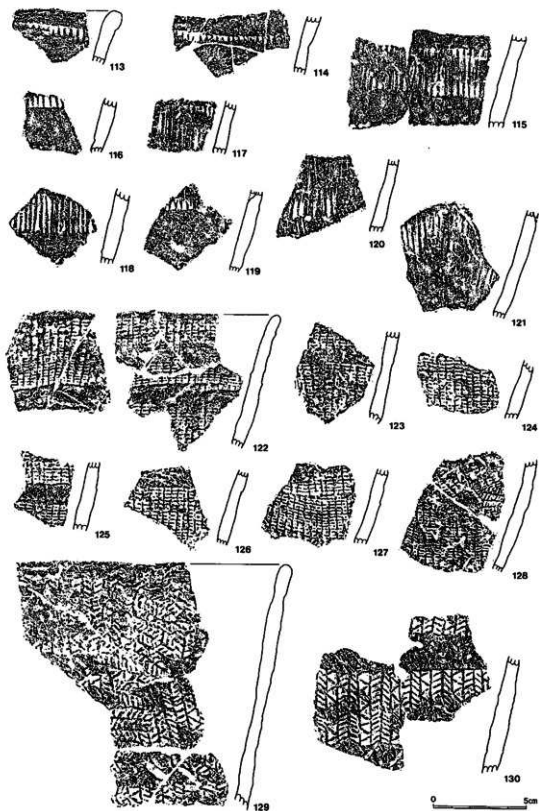


図16 大道下遺跡(第4次)出土の縄文土器8
 早期押型文土器 櫛状文(113-121)、特殊な格子目文(122-128)、綾杉状文(129-130)

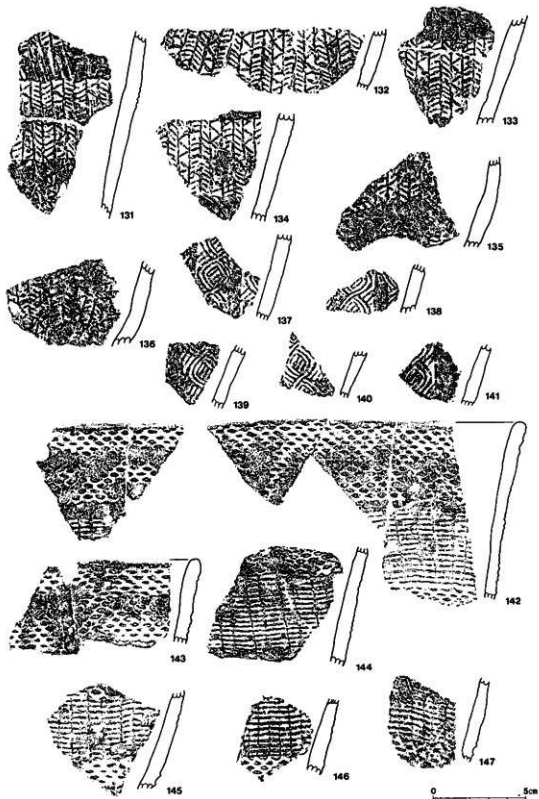


図17 大道下遺跡(第4次)出土の縄文土器9
 早期押型文土器 綾杉状文(131-136)、特殊押型文(137-141)、異種文様並列(142-147)

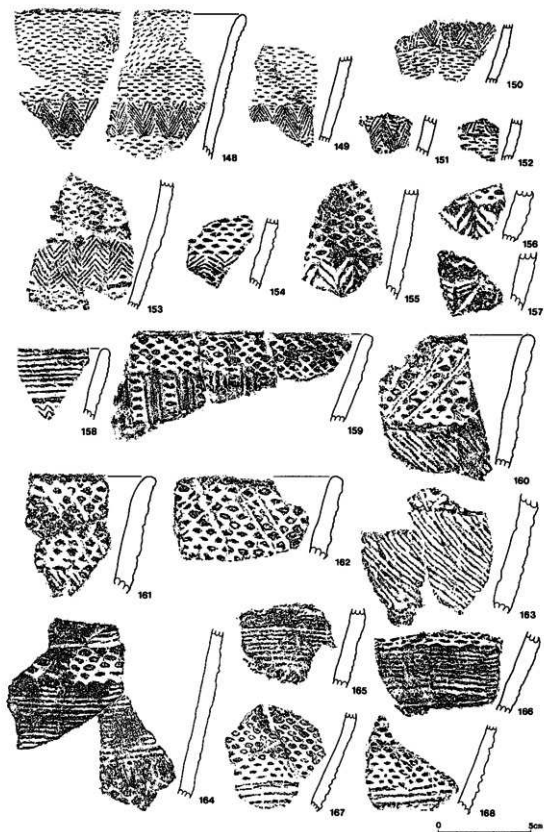
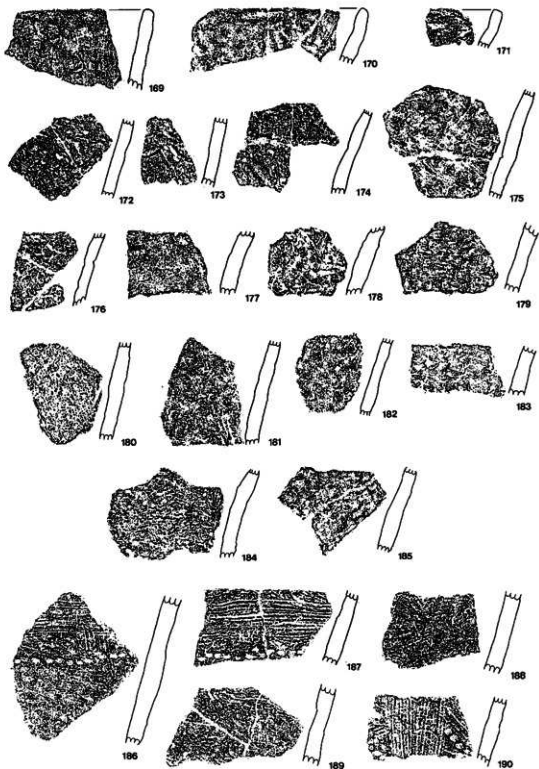


図18 大道下遺跡（第4次）出土の縄文土器10 早期押型土器 異種文様並列（148—168）



0 5cm

図19 大道下遺跡（第4次）出土の縄文土器Ⅱ 早期無文土器（169—185）、沈線文土器（186—190）

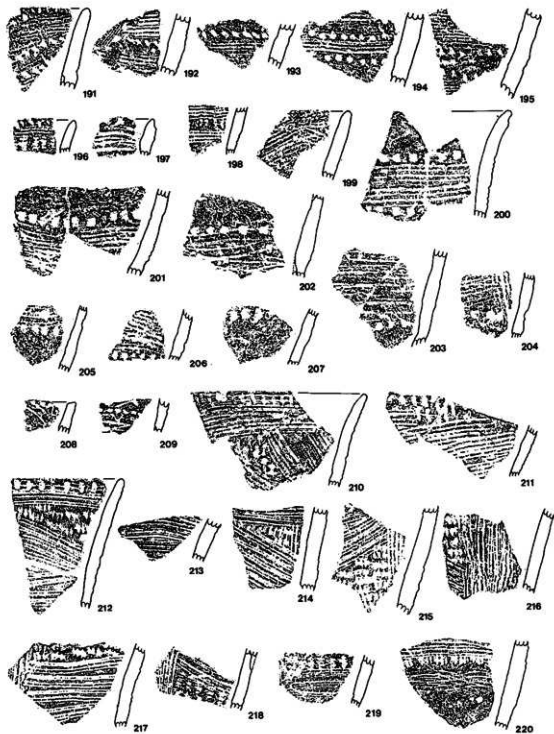


図20 大道下遺跡（第4次）出土の縄文土器12 早期沈線文系土器（191-220）

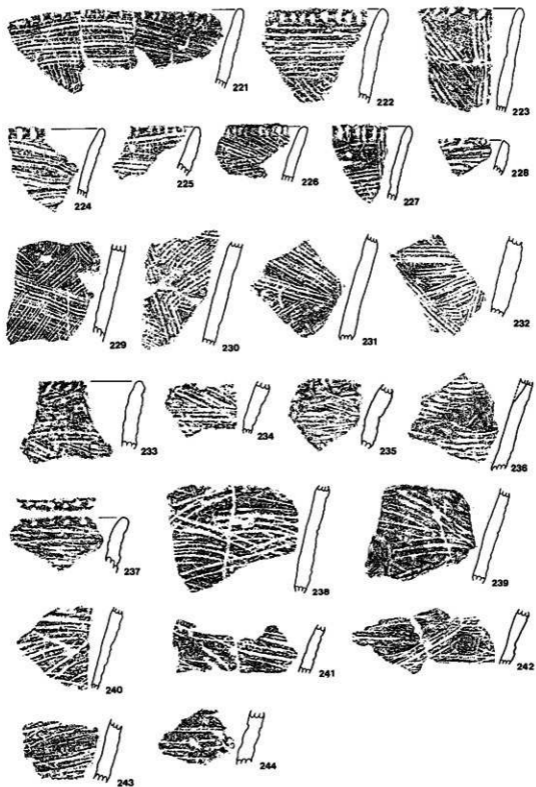


図21 大道下遺跡（第4次）出土の縄文土器13 早期沈線文系土器（221—244）

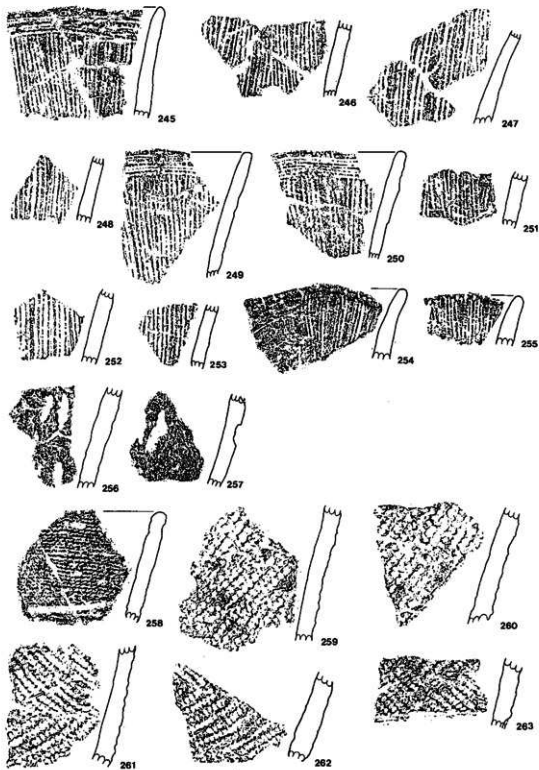


図22 大道下遺跡（第4次）出土の縄文土器14
 早期沈線文系土器（245—255）、条痕文系土器（256・257）、前期土器（258—263）

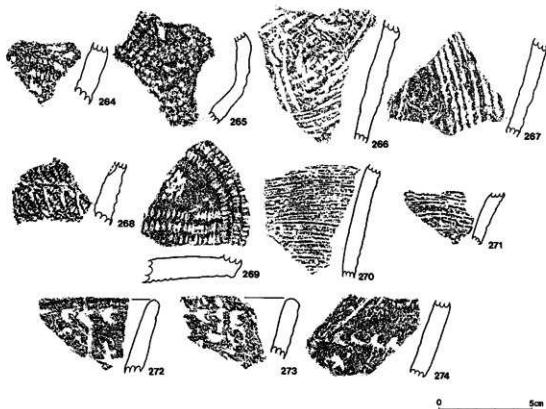


図23 大道下遺跡(第4次)出土の縄文土器15 前期土器(264-274)

4. 縄文時代の土器集中区

1) 遺物の分布

縄文時代の遺物は、斜面下部のB区と谷底の低地のC区に出土した。B区ではあまり遺物は多くなかったが、C区では大量の土器・石器が出土した。

C区では、谷と平行にC8-C13を中心に、長さ30m、幅約7mの範囲に、遺物が集中していた。

2) 縄文土器

出土した縄文土器片の総数は、2,405点である。縄文時代早期の押型土器と沈線文系土器が多くをしめている。他には、早期末の刺突文土器、前期の関山式、有尾式並行の土器がある。

A 早期1・押型土器前半期

帯状施文の押型土器や表裏縄文土器など、比較的古い段階の押型土器を中心とする一群を一括した。いずれも繊維は含まれない。

押型土器・山形文

1-8はすべて横位に帯状施文する山形文土器である。原体の長さは2.5-3cmである。1-4は明赤褐色で、器壁は7-8mmである。5-8は暗赤褐色で、胎土に中~粗粒砂を多く含む。器壁は5mmできわめて薄手である。

1-3、6は口縁部の破片であり、1をはじめ緩く外反する。

押型土器・楕円文

9-13はすべて横位に帯状施文する楕円文土器である。褐色で、胎土に細粒砂、火山灰起源の鉱物を含み、器壁は6-7mmである。原体は長さ約2.5cmである。9、10は口縁部で、緩く外反する。10は2か所に補修孔が開けられている。

押型土器・格子目文

14・15は格子目文土器である。14は赤褐色で、細かい格子目文で、器壁は8.5mmである。15は明褐色で、大きな格子目文で、器壁は約12mmである。いずれにも石英など火山灰起源の鉱物を多く胎土に含んでいる。

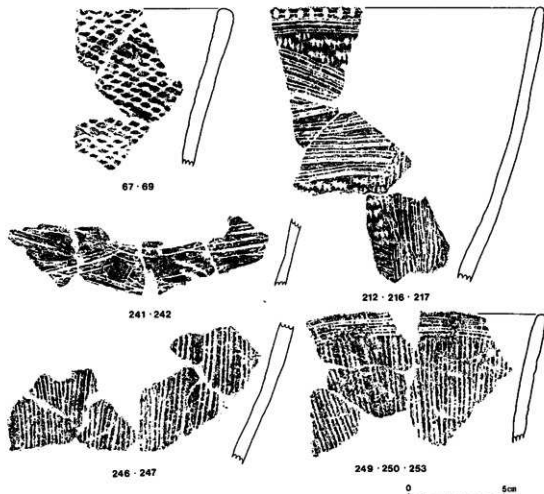


図24 大道下遺跡（第4次）出土の縄文土器16

表面縄文土器

16～19は表面縄文土器である。縄文は斜位ないし縦位に施され、裏面には外反する口縁部にのみ縄文がつけられている。16・19は単節のRL、17・18は単節のLRの縄文である。赤褐色で、胎土には石英など火山灰起源の鉱物を含んでいる。器壁は18が5.5mmで、ほかは約8mmである。

燃糸文土器

20～31は燃糸文土器である。20、22、23、25、31は横位に、21と24は横位と縦位が組み合わさったものであり、26～30は縦位を主体としたものである。いずれも無節rの細密な原体をまばらに用いている。赤褐色で、器壁が約6mmできわめて薄手である。胎土には粗粒砂～細礫を含んでいる。

縄文土器

32・33は単節RLの縄文を施した土器である。褐色で、石英など火山灰起源の鉱物を多く含んでいる。器壁は7.5～8mmで、指頭圧痕がみられる。

B 早期2・押型文土器後半期

密接施文の押型文土器で、楕円文と異形の押型文を特徴とする比較的新しい段階の押型文土器の一群を一括した。胎土に繊維を含むことが特徴である。

押型文土器・山形文

34・39～47は密接施文の山形文土器である。横位を主とするが、45は縦位の底部である。多くは淡褐色～褐色で、胎土に繊維を含んでおり、器壁は6～7mmである。46・47は大柄な山形文を用いていて、褐色で、

器壁は約8mmで、胎土に繊維を含んでいる。35-38は帯状施文の山形文土器である。胎土に繊維を含む。41-43は褐色で、器壁は7-8mmで、胎土には繊維を含んでいない。

押型文土器・楕円文

楕円文は大遺下遺跡の押型文の中では最も個体数が多く、多くのものに繊維が含まれている。

48-112は密接施文の楕円文土器である。

48は平均的な楕円文である。褐色で、器壁は8.5mmで、胎土には繊維を含む。

49-54はやや大柄な円形に近い楕円文である。赤褐色で、胎土に繊維は含まない。器壁は7-8mm。

55-61は褐色で円形に近い楕円文である。胎土に繊維は含まない。器壁は約8mmである。

62はほぼ器形を復元できる個体である。大柄でやや円形に近い楕円文であり、明赤褐色で、胎土には白色砂を少し含む。繊維を多く含む。器壁は約7mmである。原体は5.2cmである。

63-91は中粒で一般的な楕円文である。63-83は褐色、濃褐色で、胎土に灰白色の砂を少し含む。繊維を含むものと、含まないものがある。器壁は6-8mmである。

84-91は赤褐色で、胎土に暗褐色、灰色の粗粒砂・細礫を多く含む。繊維はほとんど含まないか、わずかである。器壁は7-8mmである。

92-108は細長いタイプの楕円文である。褐色で、胎土に砂をあまり含まず、繊維を含む土器である。器壁は6-9mmである。

109-112は異方向の密接施文の楕円文である。暗褐色で、器壁は6.5-7mmである。

押型文土器・楕状文

113-121は楕状文土器である。原体の長さは2.5cmである。口唇部は平らで、ごくわずかに外反する。胎土はやや明るい褐色の土器で、石英などの火山灰起源の鉱物を含む。繊維を含まないものが多いが、繊維を多く含むもの(120・121)もある。器壁は7-8mmである。

押型文土器・特殊な格子目文

122-128は横に長い長方形の押型文で、格子目文の特殊なタイプと考えられるものである。長さ3.6cmの原体を横位に帯状に施文するものが多い。胎土は赤褐色で、繊維を多く含む。粗粒砂ないし細礫を含む。器壁は約6mmで薄手である。

押型文土器・綾杉状文

129-136は縦方向の直線を軸に斜交する線が綾杉状に配列された綾杉状押型文である。長さ4.2cmの原体を帯状に施文している。129・136は異方向の密接施文と思われる。胎土はややくらい赤褐色で、いづれも繊維を多く含む。中-粗粒砂を少し含む。器壁は約8mmである。

押型文土器・特殊な押型文

137-141は四角形の直線を入り子状に重ねた特殊な文様の押型文土器である。胎土は暗褐色で、白色の細粒砂をわずかに含む。無繊維である。器壁は5-7mmである。

押型文土器・楕円文と平行線文の組み合わせ(1)

142-147は粗い間隔で縦に区画された横方向の平行線文と楕円文が組み合わされた特殊な押型文土器である。原体の長さは楕円文が4.0cm、平行線文が3.8cmで横位に密接施文されている。胎土は赤褐色-暗褐色で、細粒-粗粒の砂を含む。繊維を多く含む。器壁は約7mmで薄手である。

押型文土器・楕円文と複合山形文の組み合わせ

148-154は細長い楕円文と複合山形文を横位に密接施文した特殊な押型文土器である。細密な文様の148-152の原体の長さは楕円文が2.3cm、複合山形文が2.0cmで横位に密接施文されている。153・154の原体は少し長い。濃褐色で、胎土に中-粗粒の灰白色の砂や火山灰起源の鉱物と繊維を含む。器壁は約6mmで薄手である。

押型文土器・楕円文と綾杉状文の組み合わせ

155-157は楕円文と綾杉状文を横位に密接施文した特殊な押型文土器である。胎土は褐色で粗粒砂を多く含む。器壁は7-8.5mmである。

押型文土器・平行線文と複合山形文の組み合わせ

158は平行線文に複合山形文を横位に密接施文した特殊な押型文土器である。胎土は赤褐色で、繊維を含む。器壁は6.2mmである。

押型文土器・楕円文と平行線文の組み合わせ(2)

159-168は楕円文と平行線文を横位に密接施文した特殊な押型文土器である。

159は楕円文と3本の縦線の間に楕円と思われる横線が入られた平行線文が組み合わされており、上林中道南遺跡の「異形押型文土器D類」に類似するものである。

160-163は楕円文の中に斜位に沈線を入れ、その下に斜位の平行線文を組合せたものである。

前者もあわせて胎土は褐色で、繊維を多く含む。器壁は約8～9mmである。

164～168は楕円文と横位の平行線文を組合せたものである。胎土は明褐色で、繊維を多く含む。器壁は約7mmである。

無文土器

169～185は押型文の帯状施文の無文部より幅広の破片である。169は平らな口唇で、外面は縦方向に削って調整した跡が認められる。内面には指頭圧痕がみられる。170は内外面に指頭圧痕がみられる。

171～173は暗赤褐色で、それ以外は赤褐色を呈している。器壁は6～7mmである。胎土に繊維をほとんど含まないもの(169～173、177、179、185)と多く含むものがあるので、2時期に分けられる可能性がある。

C 早期3・沈線文土器

縄文時代早期の沈線文系の土器を一括した。最近、長野県でも注目されるようになってきた一群で、沈線文土器の最も新しい戸上層式～子母口式の段階にあたるものと推定される。沈線文、刺突文などにより文様がつけられており、その組合せによって(a)～(f)に区分される。上林中道南遺跡の貝殻文沈線文系III群土器や判ノ木山西遺跡の第3類(沈線文系)土器に共通する特徴がみられる。

(a)は237～244で、やや太めの沈線文を横位、斜位にひき、口唇部および口縁に刺突がおこなわれた土器である。沈線の幅は2mm弱で、間隔を開けて平行線や斜平行線をえがいている。器壁が5～7mmと薄手で、胎土は褐色～暗褐色で、繊維を多く含んでいる。

(b)は191～209で、櫛歯状工具による条線を横位ないし斜位にひき、その間に連続して刺突文が入れられたもの

のである。褐色～暗褐色で、器壁は約8mmのものが多いが、黒褐色の196～198、赤褐色の204～209のように約5～6mmのきわめて薄手のものもある。沈線の幅は1～2mmである。

(c)は210～220で、櫛歯状工具による条線を横位、斜位、縦位に引き、同工具で刺突を空白部に充填しているものである。190もこの可能性がある。暗褐色から濃褐色で、器壁は5～6mmときわめて薄手である。胎土には砂などはあまり多くなく、繊維を多く含んでいる。条線の幅は約1.5mmである。

(d)は221～236で、櫛歯状工具による条線を横位、斜位、縦位にひき、口縁にそって連続して刺突文や刻みが入れられたものである。明褐色のものが多く、器壁は5～6mmときわめて薄手である。胎土には繊維を含む。条線の幅は約1.5mmである。

(e)は245～255で、櫛歯状工具で条線を縦位に密接して引き、のち口縁部に横位に一周させた土器である。刺突文は伴わない。254・255は縦位の条線のみである。条線の幅は1～1.5mmである。器壁は7～9mmとやや薄く、胎土は暗褐色～濃褐色で、繊維を多く含み、白色・黒褐色の中～粗粒砂を含む。

(f)は186～189で、横方向の条線が入り、それに並行して連続した刺突文が入れられた土器である。暗褐色で、器壁は約8mmで、胎土には白色の細かい砂と繊維を多く含む。

D 早期4・条痕文土器

256～257は大柄で、粗雑な縦長の刺突文を2列(以上?)、横位に施された土器である。暗褐色で、繊維を多く含む。器壁は約9mmである。早期末の茅山上層式以降の条痕文系土器の段階のものと推定される。

表3 大道下遺跡出土の縄文土器一覧1

No	時期	文様・文様要素	産地	遺物番号	備考
1	早期	押型文 山形文・帯状施文		960MC-C11(5)	口縁部
2	*	*	*	960MC-B25-2	*
3	*	*	*	960MC-B25-2,960MC-B26(2)	口縁部3,4は同一個体?
4	*	*	*	960MC-C8	
5	*	*	*	960MC-C12	
6	*	*	*	960MC-C12(2)	口縁部6,7は同一個体?
7	*	*	*	960MC-C12(2)	
8	*	*	*	960MC-C12	
9	*	*	楕円文・帯状施文	960MC-C8,960MC-C15(2)	口縁部9,10,11,12,13は同一個体?
10	*	*	*	960MC-C15	口縁部
11	*	*	*	960MC-C8(3),960MC-C15	
12	*	*	*	960MC-C6	
13	*	*	*	960MC-C8(2),960MC-C9	
14	*	*	格子目文	960MC-C11	
15	*	*	*	960MC-B19	
16	*	縄文 表裏縄文		960MC-4住 D48	口縁部
17	*	*	*	960MC-C12	口縁部
18	*	*	*	960MC-C12	口縁部近く
19	*	*	*	960MC-4住一括カマド	胴部破片
20	*	捺朱文		960MC-C8,960MC-C9	口縁部
21	*	*	*	960MC-C2(3)	*
22	*	*	*	960MC-C9	*
23	*	*	*	960MC-C9(2)	
24	*	*	*	960MC-C9	
25	*	*	*	960MC-C9	
26	*	*	*	960MC-C9	
27	*	*	*	960MC-C9	
28	*	*	*	960MC-C2	
29	*	*	*	960MC-C9	
30	*	*	*	960MC-C9	
31	*	*	少	960MC-C12	
32	*	縄文 単踏		960MC-C7(2)	
33	*	*	*	960MC-C6	
34	*	押型文 山形文・帯状施文	有	960MC-C10,C11	口縁部
35	*	*	少	960MC-C9(2),960MC-C16	
36	*	*	*	960MC-C9	35,36は同一個体?
37	*	*	*	970MC-C10(3)	
38	*	*	*	960MC-C10	口縁部
39	*	*	山形文・帯状施文	960MC-4住 C8カマド	
40	*	*	*	960MC-C11	
41	*	*	*	960MC-C12	口縁部
42	*	*	*	960MC-C11	
43	*	*	*	960MC-C9(2)	43,44は同一個体?
44	*	*	*	960MC-C9	底部
45	*	*	山形文	960MC-C12	底部
46	*	*	(大柄横)	有 960MC-4住 C8カマド	

表4 大田下遺跡出土の縄文土器一覧2

No.	時期	文様	文様要素	編組	遺物番号	備考
47	早期	押型文	山形文	有	96OMC-C8	
48	＃	＃	栴円文・密接地文	＃	96OMC-C2(2), 96OMC-C5	口縁部
49	＃	＃	＃	＃	96OMC-C12	＃
50	＃	＃	＃	＃	96OMC-C11(2)	
51	＃	＃	＃	＃	96OMC-C12	
52	＃	＃	＃	＃	96OMC-C5	
53	＃	＃	＃	＃	96OMC-C15	
54	＃	＃	＃	＃	96OMC-C11	
55	＃	＃	＃	＃	96OMC-C8(2)	口縁部
56	＃	＃	＃	＃	96OMC-C8	
57	＃	＃	＃	＃	96OMC-C8	
58	＃	＃	＃	＃	96OMC-C8	
59	＃	＃	＃	＃	96OMC-C8	
60	＃	＃	＃	＃	96OMC-C8	
61	＃	＃	＃	＃	96OMC-C8	
62	＃	＃	＃	多	96OMC-C11(5), 96OMC-C12(44)	
63	＃	＃	＃	有	96OMC-C5, 96OMC-C12(5)	口縁部63, 64, 65, 66同一体?
64	＃	＃	＃	多	96OMC-C5(2), 96OMC-C12	＃
65	＃	＃	＃	有	96OMC-C5	
66	＃	＃	＃	＃	96OMC-C8	底部
67	＃	＃	＃	多	96OMC-C11, C-12, 96OMC-C5	67, 69同一体
68	＃	＃	＃	＃	96OMC-C12	
69	＃	＃	＃	＃	96OMC-C11	67, 69同一体
70	＃	＃	＃	少	96OMC-C8	口縁部
71	＃	＃	＃	＃	96OMC-C16	
72	＃	＃	＃	＃	96OMC-C2	＃
73	＃	＃	＃	＃	96OMC-C9	＃
74	＃	＃	＃	＃	96OMC-C9	
75	＃	＃	＃	＃	96OMC-C16(2)	
76	＃	＃	＃	＃	96OMC-C8	
77	＃	＃	＃	＃	96OMC-C12	
78	＃	＃	＃	＃	96OMC-C9	
79	＃	＃	＃	少	96OMC-C9(2)	
80	＃	＃	＃	＃	96OMC-C12	
81	＃	＃	＃	＃	96OMC-C8	
82	＃	＃	＃	多	96OMC-C16	
83	＃	＃	＃	＃	96OMC-C9	
84	＃	＃	＃	少	96OMC-C10(2), 96OMC-C9	84, 85, 86, 87, 88, 89, 90同一体?, 口縁部
85	＃	＃	＃	＃	96OMC-C9, 96OMC-C9	口縁部
86	＃	＃	＃	＃	96OMC-C9	
87	＃	＃	＃	＃	96OMC-C9	
88	早期	押型文	栴円文・密接地文	少	96OMC-C16	
89	＃	＃	＃	＃	96OMC-C9	
90	＃	＃	＃	＃	96OMC-C9	
91	＃	＃	＃	＃	96OMC-C10, 96OMC-C10	口縁部
92	＃	＃	＃	有	96OMC-C11(2)	＃ 92, 93, 94同一体?
93	＃	＃	＃	少	96OMC-C16	

表5 大道下遺跡出土の縄文土器一覧3

No	時期	文様・文様要素	編織	遺物番号	備考
94	早期	押型文 密接施文	有	96OMC-C11(4)	
95	"	"	少	96OMC-4(住一類カマド)	口縁部
96	"	"	"	96OMC-C9	
97	"	"	有	96OMC-C10(2), 96OMC-C11 96OMC-C10	97, 98, 99同一個体? 口縁部
98	"	"	少	96OMC-C3(2)	"
99	"	"	"	96OMC-C10(2)	"
100	"	"	有	96OMC-C2, 96OMC-C10(3) 96OMC-10(5)	"
101	"	"	少	96OMC-B24	"
102	"	"	"	96OMC-C9	
103	"	"	"	96OMC-B19(6)	
104	"	"	"	96OMC-C9(2)	口縁部
105	"	"	"	96OMC-C12(2)	
106	"	"	"	96OMC-C8	
107	"	"	有	96OMC-C11(2)	口縁部, 107, 108同一個体?
108	"	"	"	96OMC-C1	
109	"	横円文・真方向密接施文		96OMC-C6	口縁部
110	"	"	少	96OMC-C9(2)	"
111	"	"	"	96OMC-C10, 96OMC-C11	
112	"	"	有	96OMC-C10	底部
113	"	横状文		96OMC-C16	口縁部
114	"	"		96OMC-C16(5)	
115	"	"		96OMC-C9(2)	
116	"	"		96OMC-C11	
117	"	"		96OMC-C9	
118	"	"	少	96OMC-C12	
119	"	"		96OMC-C11	
120	"	"	有	96OMC-C11	
121	"	"	"	96OMC-C11	
122	"	特殊な格子目文	多	96OMC-C12(2) 96OMC-C12(5)	口縁部, 122, 123, 124, 125, 126 127, 128同一個体?
123	"	"	"	96OMC-C13	
124	"	"	"	96OMC-C12	
125	"	"	"	96OMC-C12	
126	"	"	"	96OMC-C12	
127	"	"	"	96OMC-C12	
128	"	"	"	96OMC-C12(2)	
129	"	綾杉状文	多	96OMC-C9(5)	129, 130, 131, 132
130	"	"	"	96OMC-C9, 96OMC-C11	133, 134, 135同一個体?
131	"	"	"	96OMC-C9(2)	
132	"	"	"	96OMC-C9(3)	
133	"	"	"	96OMC-C9(2)	
134	"	"	"	96OMC-C9	
135	"	"	"	96OMC-C9	
136	"	"	"	96OMC-C9	
137	"	特殊		96OMC-C11	
138	"	"		96OMC-C12	

表6 大道下遺跡出土の縄文土器一覽4

No.	時期	文様・ 文様要素	縄維	遺物番号	備考
139	早期	押型文 特殊		96OMC-C11	
140	"	" "		96OMC-C11	
141	"	" "		96OMC-C4	
142	"	" 楕円文, 平行線文	多	96OMC-C12(4), 96OMC4住-括カマフ 96OMC-C15(2)	口縁部, 142, 143, 144, 145, 同一個体
143	"	" "	"	96OMC-C8, C11	口縁部
144	"	" "	"	96OMC-C8(2)	
145	"	" "	"	96OMC-C12	
146	"	" "	"	96OMC-B27	146, 147は同一個体
147	"	" "	"	96OMC-B27	
148	"	" 楕円文, 複合山形文	少	96OMC-C10(2) 96OMC-C10	口縁部, 148, 149 150, 151, 152同一個体
149	"	" "	"	96OMC-C10	
150	"	" "	"	96OMC-C10(2)	
151	"	" "	"	96OMC-C10	
152	"	" "	"	96OMC-C12	
153	"	" "	有	96OMC-B28(3)	
154	"	" "	多	96OMC-C9	
155	"	" 楕円文, 縞杓状文	少	96OMC-C12	
156	"	" "	"	96OMC-C11	
157	"	" "	"	96OMC-C13	
158	"	" 平行線文・複合山形文	"	96OMC-C11	口縁部
159	"	" 楕円文, 平行線文	多	96OMC-C2, 96OMC-C9(2)	"
160	"	" 楕円文, 平行線文, 沈線文	"	96OMC-C9	" 160, 161, 162, 163
161	"	" "	"	96OMC-C9(2)	" 同一個体?
162	"	" "	"	96OMC-C1(2)	
163	"	" "	"	96OMC-C2(2)	
164	"	" 楕円文, 平行線文	"	96OMC-C12, C13	
165	"	" "	"	96OMC-C10	
166	"	" "	"	96OMC-C13	
167	"	" "	有	96OMC-B9(2), 96OMC-B19	167, 168同一個体?
168	"	" "	"	96OMC-B19	
169	"	無文		96OMC-C12	口縁部
170	"	" "		96OMC-C10(4)	
171	"	" "		96OMC-4住C8	口縁部, 171, 172, 173
172	"	" "		96OMC-C15(2)	同一個体?
173	"	" "		96OMC-C8	
174	"	" "	多	96OMC-C1, C8, C9	174, 175同一個体?
175	"	" "	"	96OMC-C9(3)	
176	"	" "	"	96OMC-C12(3)	
177	"	" "		96OMC-C10	
178	"	" "	少	96OMC-C9	
179	"	" "		96OMC-C10	
180	"	" "	少	96OMC-C8	
181	"	" "	多	96OMC-C9	
182	"	" "	"	96OMC-C5	
183	"	" "	少	96OMC-C5	
184	"	" "	多	96OMC-C8	

表7 大道下遺跡出土の縄文土器一覧5

No.	時期	文様・文様要素	編織	遺物番号	備考
185	早期	無文		96OMC-C10(2)	
186	"	沈線文系 (f)条線, 刺突文	多	96OMC-C8	
187	"	"	"	96OMC-C1(2)	
188	"	"	"	96OMC-C1	
189	"	"	"	96OMC-C1(3)	
190	"	(c)条線, 刺突文	"	96OMC-C9	
191	"	(b)条線, 刺突文	"	96OMC-C1	口縁部
192	"	"	"	96OMC-C1	
193	"	"	"	96OMC-C2	
194	"	"	"	96OMC-C1	
195	"	"	"	96OMC-C1	
196	"	"	"	96OMC-C8	口縁部
197	"	"	"	96OMC-C4	口縁部
198	"	"	"	96OMC-C8	
199	"	"	"	96OMC-C8	口縁部
200	"	"	有	96OMC-C5, 96OMC-C12	
201	"	"	"	96OMC-C12(2)	
202	"	"	多	96OMC-B19	202, 203同一體?
203	"	"	"	96OMC-C11(2)	
204	"	"	"	96OMC-C4	
205	"	"	"	96OMC-C11	
206	"	"	"	96OMC-C11	
207	"	"	"	96OMC-C5	
208	"	"	少	96OMC-C11	口縁部
209	"	"	"	96OMC-C11	
210	"	(c)条線, 刺突文	有	96OMC-C8(3)	口縁部
211	"	"	少	96OMC-C9, C11	
212	"	"	多	96OMC-C9(2)	口縁部, 216, 217同一體
213	"	"	"	96OMC-4住 C8カマド	
214	"	"	"	96OMC-B25	
215	"	"	有	96OMC-B7-2(2)	
216	"	"	多	96OMC-C9	212, 217同一體
217	"	"	"	96OMC-B16-2	212, 216同一體
218	"	"	"	96OMC-C12	
219	"	"	有	96OMC-C12	
220	"	"	"	96OMC-B16	
221	"	(d)条線, 刺突文・刻み	"	96OMC-C2, 96OMC-C10(3)	口縁部
222	"	"	"	96OMC-C8	"
223	"	"	"	96OMC-C8(2)	"
224	"	"	"	96OMC-C10	"
225	"	"	"	96OMC-C11	"
226	"	"	"	96OMC-C11	"
227	"	"	"	96OMC-C10	"
228	"	"	多	96OMC-C5	"
229	"	"	"	96OMC-C9	"
230	"	"	有	96OMC-B27-2, (2)	230, 231, 232同一體?
231	"	"	"	96OMC-B27-2	

表8 大道下遺跡出土の縄文土器一覧6

No	時期	文様・文様要素	線数	遺物番号	備考
232	早期	沈線文系 (d)条線, 刺突文・刻み	#	960MC-B27-2, (2)	
233	"	"	#	960MC-C9	口縁部, 233, 234, 235同一個体?
234	"	"	少	960MC-C9	
235	"	"	#	960MC-C12	
236	"	"	#	960MC-C12	
237	"	(a)沈線文, 刺突文	多	960MC-C11	口縁部
238	"	(a)沈線文	#	960MC-C6(3)	
239	"	"	#	960MC-C13(2)	
240	"	"	#	960MC-C13	
241	"	"	#	960MC-C6, C13	241, 242同一個体
242	"	"	#	960MC-C6(2), 960MC-C13	"
243	"	"	#	960MC-C11	
244	"	"	#	960MC-C12	
245	"	(e)条線	少	960MC-C5(5)	口縁部, 245, 246, 247, 248同一個体?
246	"	"	有	960MC-C12(3)	246, 247同一個体
247	"	"	#	960MC-C5(3)	"
248	"	"	#	960MC-C5	
249	"	"	#	960MC-C12	口縁部, 249, 250, 253同一個体
250	"	"	#	960MC-C5(2)	" , 249, 250, 253同一個体
251	"	"	#	960MC-C12	249と同一個体?
252	"	"	#	960MC-C5	"
253	"	"	少	960MC-C5	249, 250, 253同一個体
254	"	"	有	960MC-C2	口縁部
255	"	"	有	960MC-C9	"
256	早期末	条線文系 刺突文	多	960MC-C11(2)	
257	"	"	#	960MC-C8	
258	前期前半	縄文 単線	#	960MC-C8(2)	
259	"	"	少	960MC-C10	
260	"	"	#	960MC-C11(2)	
261	"	羽状縄文 単線	#	960MC-C8(4)	
262	"	"	多	960MC-C8	
263	"	"	少	960MC-C11	
264	"	縄文	有	960MC-C9	
265	"	"	多	960MC-C9	底面近く
266	"	" 無文	#	960MC-C9	
267	前期初期 (花輪下層)	条線文	#	960MC-C12	
268	前期中葉 (園山)	縄文 多段ループ文	#	960MC-C11	
269	"	大湾式 刺突文	#	960MC-C10	底面
270	前期後葉 (跡橋c)	条線沈線文		960MC-B14-4	270, 271同一個体
271	"	"		960MC-B23-3	
272	前期	刺突文 爪形文	有	960MC-C12(2)	272, 273同一個体? 口縁部
273	"	"	#	960MC-C5	"
274	"	"	少	960MC-C11	

E 前期の土器

258~266は前期中半の縄文土器である。258は単節の縄文、259・260は複節LR Lの縄文である。

261~263は単節R L、L Rの原体を交互に回転した羽状縄文である。264・265は単節の縄文土器の底部付近の破片である。266は無節Iをランダムに施文した縄文土器である。

267は前期初頭の花柄下層併行の粗いIを縦方向にまばらに施文した摺糸土器である。

268は前期中葉の関山式並行の多段ループ文である。269は前期中葉の関山式併行の大溝式土器の平底の底部で、爪形状の刺突文が連続して施文されている。

270・271は前期後葉の踏碇C式の集合沈線文土器である。

272~274は前期の刺突文土器で、口縁にそって大柄な爪形文が連続している。

3) 石器

主要な石器としては、石鏃6点、石鏃の可能性のあるもの2点、スクレイパー5点、装飾品1点、磨製石斧1点、磨製石鏃1点である。このほか、剥片類約140点、石核4点、特殊磨石31点、磨石51点、凹石10点、スタンプ状石器1点、石皿及び石皿状礫12点、および砥石5点などが出土した。

石鏃：チャート製のもの1・5・8、珪質凝灰岩製のもの2・7、黒曜石製のもの3、無斑晶質安山岩製のもの4、玉髓製のもの6がある。

1~3・6は、凹基ないし平基の無基鏃である。7・8は尖基鏃と思われる。

トトロ石器：5は、チャート製で、両面に押圧剝離による丁寧な調整がおこなわれている。先端は丸みをもっており、基部には脚部があるが欠損している。磨痕はみられない。形態的な特徴から、押型文土器文

化に伴うとされている岡本(1983)のいわゆる「トトロ石器」と判断した。

スクレイパー：黒曜石製の9・12、無斑晶質安山岩製の11、珪質頁岩製の10、珪質凝灰岩製の13がある。

9は、剥片の末端に入念な調整で刃部が形成されたラウンド・スクレイパーである。11・12は剥片の一辺に直線的な刃部がつくられたもので、12は両面から剝離がおこなわれている。10は剥片の縁辺にそって両面からの剝離で刃部が形成されたサイド・スクレイパーである。13は剥片の縁辺にわずかな調整で刃部がつくられたサイド・スクレイパーである。

磨製石斧：14は、蛇紋岩製で、ほぼ全面を研磨した石斧である。一面は扁平で、もう一面は凸形の断面形を呈する。

装飾品：15は、透緑閃石? (軟玉)を用いて、全面を研磨している。大珠に似た形状を呈するが、穴は開けられていない。比重が2.98で、ヒスイより軽いので、軟玉と判断した。

特殊磨石：16~18は砂岩製、19は安山岩製の細長い円礫を素材とし、長軸にそった尖った縁部をすり減らして磨面を作り出した特殊磨石である。

磨石：20は安山岩製、21はカコウ閃緑岩製の扁平な円礫を素材として、その平坦な2面を磨面とする磨石である。

凹石：22~24は安山岩製の扁平な円礫を素材として、平らな表裏の2面に凹部をもつ凹石である。

スタンプ状石器：25は細長い円礫を中央付近で折ったスタンプ状石器である。

石皿：26は大きな扁平な礫を用い、その一面に磨面が認められる石皿状の礫である。

砥石：27、28は方形の砥石である。形状から見ると、縄文時代のものでなく、平安、中世以降の金属製の刃物に伴うものと思われる。

表9 大湫下遺跡の出土石器一覧

No.	名称	石材	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	石 鏃	チャート	960MC-C11	1.6	1.5	0.3	0.5	
2	"	珪質凝灰岩	960MC-C4	2.3	1.4	0.5	1.1	
3	"	黒曜石	960MC-C8	2.0	1.4	0.3	0.7	
4	"	無珪晶質安山岩	960MC-C10	2.2	1.9	0.5	2.0	
5	"	チャート	960MC-C10	1.7	1.4	0.5	1.5	トロトロ石跡
6	"	玉 髓	960MC-C9	2.1	0.6	0.3	0.5	
7	石 鏃	珪質凝灰岩	960MC-C13	2.5	1.5	0.9	3.1	
8	"	チャート	960MC-C11	2.8	1.2	0.5	1.5	
9	スタレイバー	黒曜石	960MC-C9	2.0	2.4	0.8	4.0	
10	"	珪質頁岩	960MC-C16	5.7	2.7	0.5	9.2	
11	"	無珪晶質安山岩	960MC-C12	3.5	4.1	0.6	15.2	
12	"	黒曜石	960MC-C9	3.4	4.2	1.3	11.2	
13	"	珪質凝灰岩	960MC-C11	8.1	4.1	0.8	22.7	
14	磨製石斧	乾杖岩	960MC-C5	6.2	4.3	1.2	52.8	
15	装饰品	軟玉(透緑閃石?)	960MC-C2	5.9	3.7	1.5	56.0	
16	特殊磨石	砂 岩	960MC-C13	19.4	4.6	8.9	1170	
17	"	"	960MC-C11	12.0	5.0	7.1	580	
18	"	"	960MC-C12	18.8	5.1	7.6	1040	
19	"	安山岩	960MC-C9	18.3	6.7	7.7	1190	
20	磨 石	"	960MC-A8-3	7.8	6.7	4.5	300	
21	"	カコウ閃綠岩	960MC-C13	9.1	7.1	4.1	370	
22	凹 石	安山岩	960MC-C9	9.4	8.1	3.6	370	
23	"	"	960MC-C11	11.0	5.3	3.3	275	
24	"	"	960MC-C13	8.8	7.1	3.9	262	
25	スタンプ状石器	閃綠岩	960MC, 3往 A8	11.5	7.0	3.5	391	
26	石 皿	安山岩	960MC-C9	26.1	15.9	7.7	3570	
27	砥 石	安山岩	960MC-C8	6.4	2.9	3.6	86.4	
28	"	凝灰岩	960MC, B6-2	7.4	2.4	2.8	73.0	

単位: cm, g

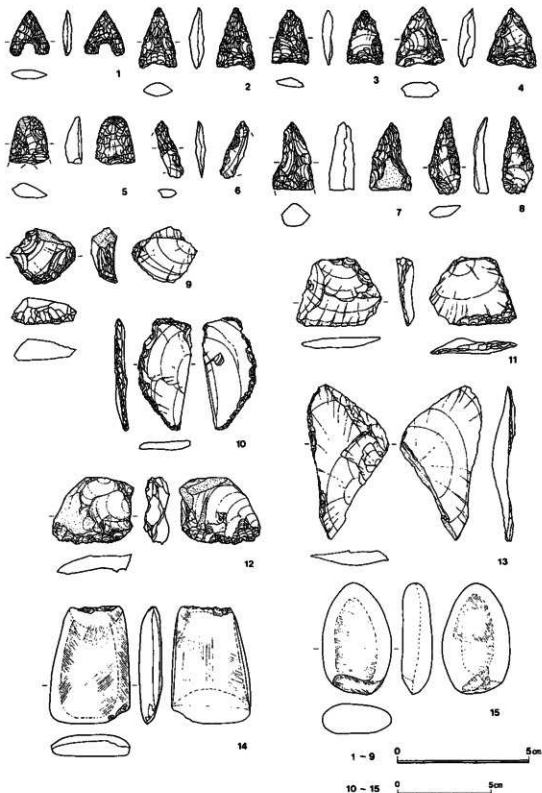


図25 大道下遺跡（第4次）出土の縄文時代石器1

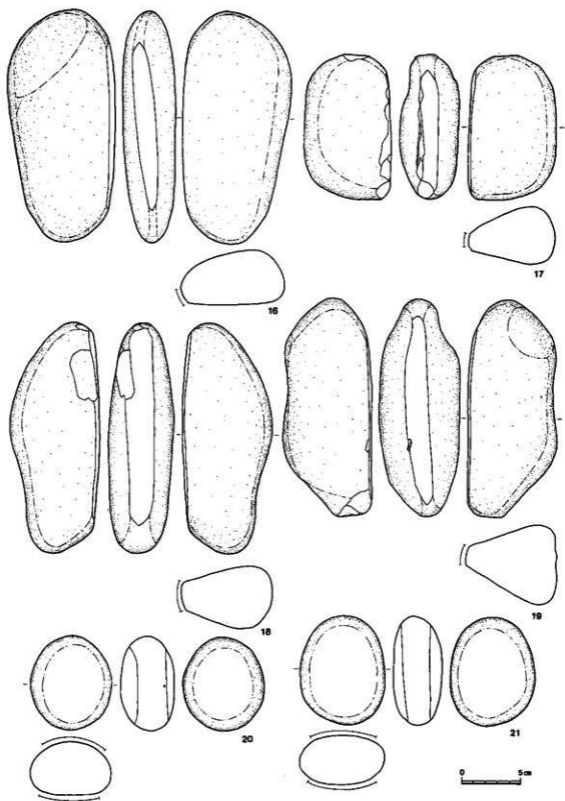


図26 大道下遺跡（第4次）出土の縄文時代石器2

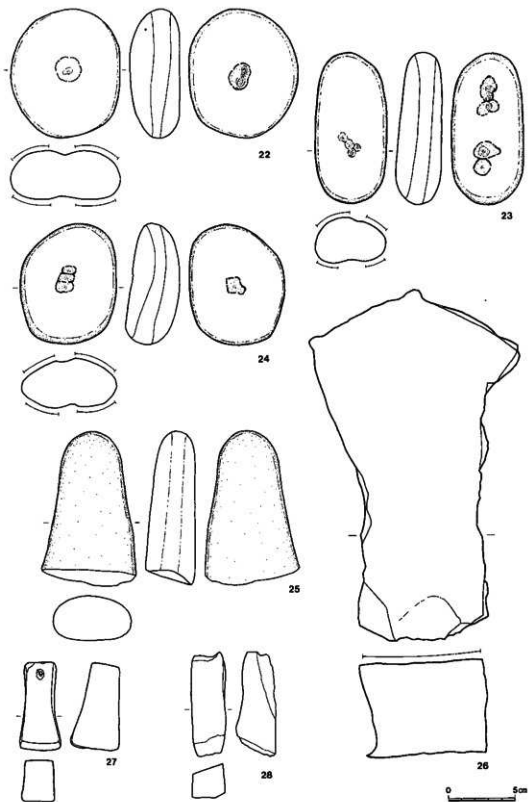


図27 大道下遺跡（第4次）出土の縄文時代石器3

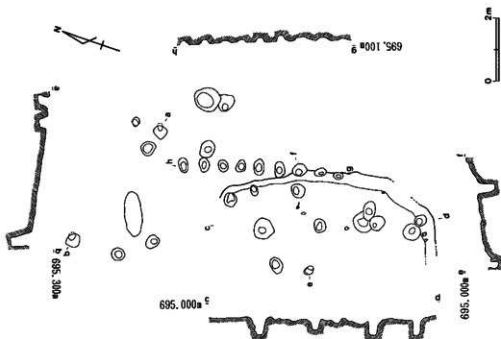


図29 大道下遺跡（第4次）3号住居址の平面図
上半部のピットは「2号住居址」のもの

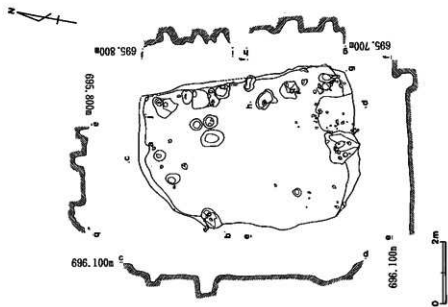


図28 大道下遺跡（第4次）1号住居址の平面図

5. 平安時代の住居址

1) 遺構

最も保存の良い1号住居址は、南北7.2m、東西の保存長が5.1m以上で、東側は国道の盛土の下にあり発掘できなかった。確認面からの床面の深さは、平均20~40cmであり、西側は数cmと侵食により削られていた。かまどは南壁中央付近にあったが、破壊されており保存はよくなかった。かまどの西隣には長径約110cmのピットが掘り込まれていた。住居址内には9個の柱穴と思われるピットがあり、深さは15~75cmであった。西端の柱穴には、ほぼ完形の小形の須恵器の壺が埋もれていた。

2号住居址は3号の北側に隣接するが、柱穴と思われるピットが4個以上と雑土が集まったものであるが、プランは確認できなかった。

3号住居址は南北約7.2m、東西の保存長3.4m以上の竪穴住居址で、西側の半分は削刺され現存しない。確認面から床面までの深さは、約20~40cmである。9個ほどのピットがあり、大きさは径30~60cm、深さは15~81cmである。かまどは未確認である。

4号住居址はプランの東南の隅のみが確認されたものであり、南北5.6m以上、東西の保存長は7.5mである。確認面からの床面の深さは、南東端で45cmであったが、ほかは不明である。南壁のほぼ中央付近と思われるところにかまどがあったが、破壊されており原型を留めていなかった。6個の柱穴と思われるピットが

あり、径は30cm~120cm、深さは約10cmであった。

これらの住居址の付近には、大量の土器片が伴っていた。

B区には遺構が確認されてなく、遺物の分布にあまり大きな偏性がみられないことから、1~3号住居址があった国道直下から東側にひろがる平坦面に、さらに多くの住居址があったと思われる、そこから流れ下ったものと推定される。

2) 平安時代の遺物

1~3号住居址のあるA区から出土した平安時代の土器は1,543点あり、4号住居址のあるC区からは土器が986点出土した。また遺構は伴わないが、B区からは3,211点の土器が出土した。さらに、A~C以外の地区をD区と一括したが、そこから1,201点の平安時代の土器がえられており、総計7,262点の土器片が出土している。

これらの中で、保存のきわめて悪い2号と3号住居址は近接しており、区分できないのでまとめて示す。土器は接合して器形わかる口径16分の1以上、底径3分の1以上の破片について観察表を作成した。ただし、特徴のある遺物については小片でも付け加えた。土器の分類は「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編」の「古代の土器」(長野県教育委員会、1990)にしたがった。

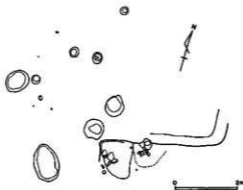


図30 大道下遺跡(4次)4号住居址の平面図

A 1号住居址出土の土器

環 須恵器と軟質須恵器、黒色土器の環がある。須恵器は、灰色で焼きがつよく、ロクロ調整のものである。底部回転糸切りで、法量は軟質須恵器のもの範疇に含まれ、無口台の環Aに分類される。

軟質須恵器は、灰白色あるいは灰黄色で焼きが弱い。ロクロ調整で、底部は回転糸切りである。法量は、口径11.6～13.2cm、器高3.4～3.9cm、底径5.8～6.2cmで、環Aに分類される。

黒色土器は、ロクロ調整の土師器の内面をヘラミガキし、黒色処理したものである。内面だけに黒色処理が施される黒色土器Aである。底部は回転糸切り後ヘラ削りを施している。

片口鉢 土師器の片口鉢が1点ある。赤褐色で、外面ロクロ調整で、内面にヘラミガキをおこなっている。

小型甕 土師器の甕には、長胴甕と小型甕がある。口径15cm以下のものを小型甕という。すべてロクロ調整である。底部が残っているものは1点のみで、回転糸切り未調整である。法量は口径12.4～14.2cmである。

長胴甕 口径約24cmの土師器の長胴甕が2点ある。ロクロ甕である。14は、外面をロクロ調整し、体部から下を縦方向のヘラ削りによって器厚を薄く仕上げ、内面はカキ目調整している。13の内面はハケ目調整している。

16・17は甕？としているが、器種は不明である。

須恵器・長頸壺 19はやや扁平な球形胴にやや短い頸部をつけるもので、典型的な形態とは異なるが小型の長頸壺である。

B 2号・3号住居址出土の土器

杯 須恵器と軟質須恵器、黒色土器の杯がある。いづれもロクロ調整のものである。須恵器は3点あり、底部は回転糸切りで、法量は1号住居址のものと同様である。26は須恵器の杯蓋である。軟質須恵器は3点ある。23は口径約11.0cm、底径約3.0cm、高さ4.1cmであり、他のものとは法量を異にする。黒色土器は4点ある。底部を残すものは30のみで、回転糸切り未調整である。

土師器・長胴甕 口径約23cmの口縁部と底部の破片2点がある。ロクロ甕である。31は外面をロクロ調整し、内面をカキ目調整したものである。

須恵器・甕および壺 口径約39cmの大型の甕の口縁部(33)が1点ある。36は長頸壺の底部と思われる。

C 4号住居址出土の土器

環 須恵器、軟質須恵器、黒色土器の環がある。いづれもロクロ調整のものである。須恵器は1点で、口縁部のみであるが、立ち上がりやや急な角度のものである。軟質須恵器は3点あり、底部は回転糸切りである。黒色土器は1点である。

土師器・長胴甕 口径約25cmと約19cmの口縁部がある。ロクロ甕である。45は外面をロクロ調整し、体部から下を縦方向のヘラ削りによって器厚を薄く仕上げている。

47は土師器の甕の破片とみられるが、表裏に叩き目がみられる。

須恵器・甕 大きな甕の胴部の破片である。叩き目がみられる。

D 住居址出土の土器の所属時期

1号住居址の主な土器は、須恵器環2点、軟質須恵器環3点、黒色土器環3点、片口鉢1点、小型甕5点、長胴甕2点、甕？2点、須恵器長頸壺1点がある。環Aの土器構成は、点数が少ないが軟質須恵器、黒色土器ともに37.5%、須恵器25%である。

3号住居址の主な土器は、須恵器環3点、軟質須恵器環3点、黒色土器環4点、須恵器杯蓋1点、土師器長胴甕2点、須恵器甕3点、須恵器長頸壺1点である。環Aの土器構成は、黒色土器40%、須恵器30%、軟質須恵器30%である。

4号住居址の主な土器は、須恵器環1点、軟質須恵器環4点、黒色土器環1点、土師器長胴甕4点、土師器甕1点、須恵器甕1点である。環Aの土器構成は、軟質須恵器66%、須恵器と黒色土器はともに17%である。

これらの遺構出土の土器は、須恵器と黒色土器とともに軟質須恵器が多く含まれることが共通した特徴であり、いづれもほぼ同一の時期のものと考えられる。これらは長野県教育委員会(1990)の食器の15期区分にしたがえば、8期(西暦870～900年ごろ)前後に比定され、9世紀の後半にあたり、平安時代の前期のものである。

E 墨書土器

墨書土器は9点出土しているが、文字の判読可能なものは7点である。この中で「石井」と読めるものが5点ある。22・50はほぼ確実に、8・42・51は1字だけであるが、同じものと考えられる。この5点は1号、

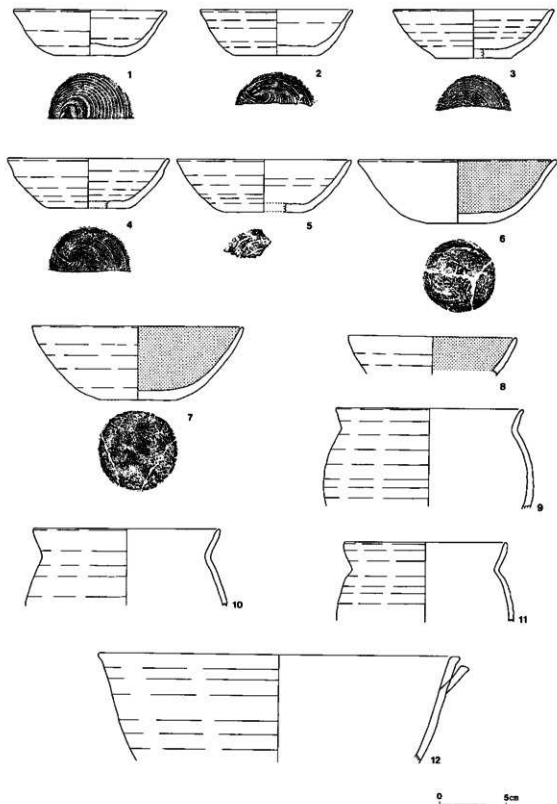


図31 大通下道跡（4次）出土の平安時代土器 1 1号住居址

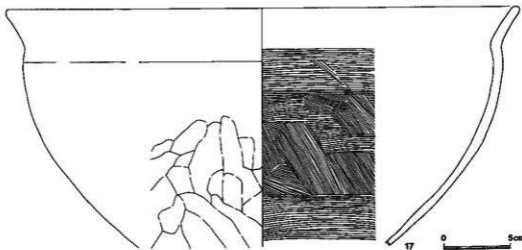
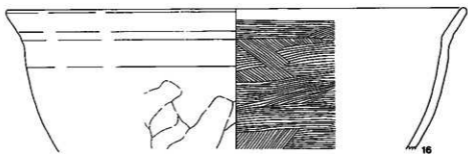
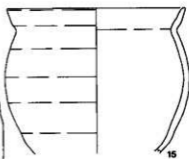
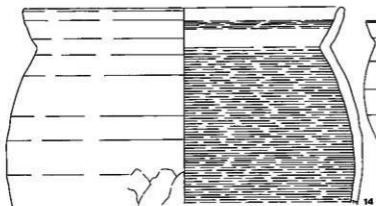
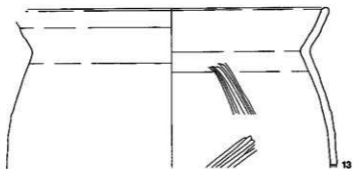


図32 大道下遺跡（4次）出土の平安時代土器 2 1号住居址

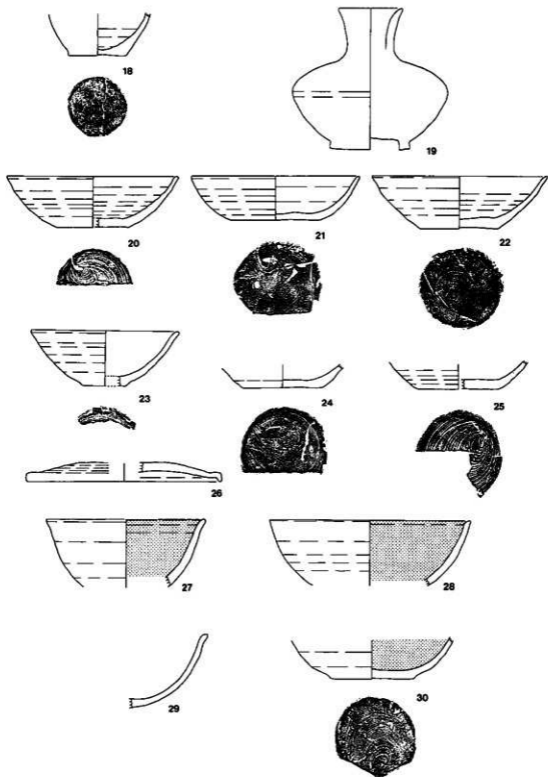


図33 大道下遺跡（4次）出土の平安時代土器 18・19：1号住居址、20～：3号住居址

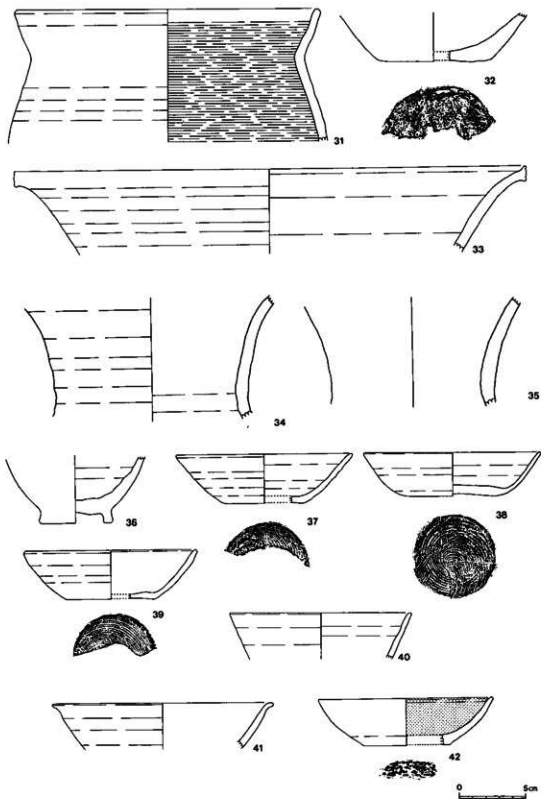


図34 大道下遺跡（4次）出土の平安時代土器4 36～37：3号住居址、37～4号住居址

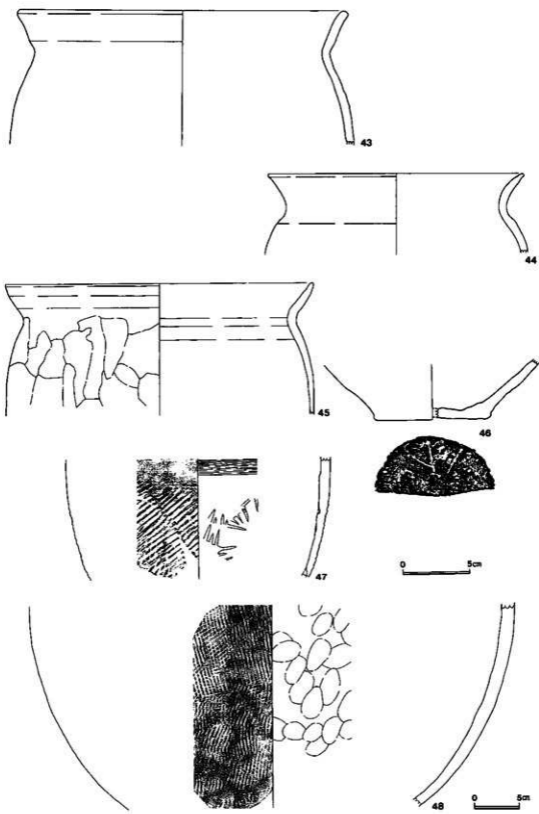


図35 大道下遺跡（4次）出土の平安時代土器 5 4号住居址

表10 大道下遺跡出土の平安土器一覧

1号住居址

番号	種類	器類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	遺物番号	備考
1	須恵器	杯	11.6	5.8	3.4	1/4	96OMC1住1-1	
2	軟質須恵器	杯	11.6	6.2	3.4	5/16	96OMC1住-2	
3	軟質須恵器	杯	12.2	5.8	3.6	3/8	96OMC1住-3	
4	須恵器	杯	12.2	6.0	3.7	1/8	96OMC1住-4	
5	軟質須恵器	杯	13.2	5.8	3.9	1/8	96OMC1住周辺-5	
6	黒色土器	杯	15.2	4.7	5.0	11/16	96OMC1住周辺 カマド・I住-6	
7	黒色土器	杯	16.0	5.8	5.5	1/4	96OMC1住-7	
8	黒色土器	杯	12.8			1/8	96OMC・D52-8	須恵土器
9	土師器	小型甕	14.2			1/8	96OMC1住-9	
10	土師器	小型甕	14.2			3/16	96OMC1住-10	
11	土師器	小型甕	12.4			1/8	96OMC1住周辺-11	
12	土師器	片口鉢				口縁部	96OMC1住カマド1住-12	
13	土師器	甕	24.0			1/4	96OMC1住カマド-13	
14	土師器	甕	24.4			1/4	96OMC1住カマド1住-14	
15	土師器	小型甕	13.4			3/4	96OMC1住カマド-15	
16	土師器	甕?	35.0			1/8	96OMC1住カマド-16	
17	土師器	甕?	約39			1/16	96OMC1住-17	
18	土師器	小型甕		4.4			底部	96OMC1住-18
19	須恵器	盃	4.8	6.0	10.5	ほぼ完全	96OMC1住-19	

3号住居址

20	軟質須恵器	杯	13.0	5.5	3.8	1/4	96OMCA3-4-III-1	
21	軟質須恵器	杯	12.8	6.3	3.3	1/4	96OMCA3A3-4-2	
22	軟質須恵器	杯	13.2	5.8	3.9	5/8	96OMC3住-3	須恵土器
23	軟質須恵器	杯	約11	約3.0	4.1	3/16	96OMC2住周辺-4	
24	軟質須恵器	杯		6.2		底部	96OMCA-8-5	
25	軟質須恵器	杯		6.2		底部	96OMCA6A-1-6	
26	軟質須恵器	杯蓋	15			1/8	96OMC-7	
27	黒色土器	杯	約12			3/16	96OMCA3-8	須恵土器
28	黒色土器	杯	約15			3/16	96OMCA8-9	
29	黒色土器	杯				口縁部	96OMCA3-10	
30	黒色土器	杯		6.2		底部	96OMCA8-11	
31	土師器	甕	約23			3/16	96OMCA4-3-3住 A8・A4-12	
32	土師器	甕		8.5		底部	96OMCA8-13	
33	須恵器	甕	約39			1/16	96OMC3住-14	
34	須恵器	甕?				頸部	96OMC3住カマド-15	
35	甕?					頸部	96OMCA4-16	
36	須恵器	盃?		5.6		底部	96OMCA6-1A6-2-17	

4号住居址

37	軟質須恵器	杯	13.3	6.1	3.7	1/4	96OMC4住4住一組IV-1	
38	軟質須恵器	杯	13.4	6.2	3.3	1/8	96OMC4住 C8カマド-2	
39	軟質須恵器	杯	13.4	6.6	3.8	1/2	96OMC4住-3	
40	軟質須恵器	杯	13.8			1/4	96OMC4住-4	
41	軟質須恵器	杯	17.0			1/16	96OMC4住 C8カマド-5	
42	黒色土器	杯	13.2		3.5	1/8	96OMC4住一住-6	須恵土器
43	土師器	甕	約25			3/16	96OMC4住 C8カマド-7	
44	土師器	甕	約19			3/16	96OMC4住 C8カマド-8	

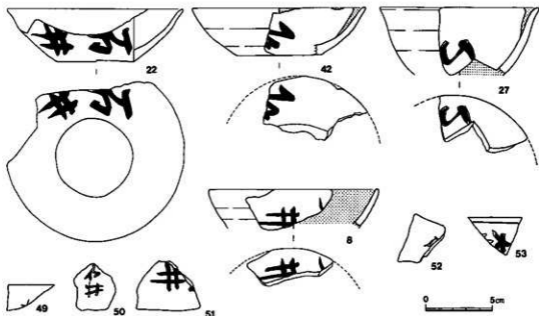


図36 大道下遺跡（4次）出土の墨書土器



図37 大道下遺跡（4次）出土の弥生時代土器

表11 大道下遺跡出土の平安土器一覧

番号	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	遺物番号	備考
45	土師器	甕	23.4			1/4	96OMC4住C8カマド-9	
46	土師器	甕		8.8		底部	96OMC4住-10	
47	土師器	甕				胴部	96OMC4住周辺-11	
48	須恵器	甕				胴部	96OMCC8カマド-12	
49	秋賀須恵器	杯					96MC	墨書土器
50	黒色土器?	杯					96OMC4住	"
51	黒色土器	杯					96OMC4住一拵	"
52	土師器	杯?					96OMC4住	"
53	秋賀須恵器	杯					96OMC1住カマド	"

表12 大道下遺跡出土の弥生土器一覧

No	種類	文様	文様要素	遺物番号	備考
1		柵線文	波状文	96OMC	口縁部
2		"	"	96OMC (3)	
3		"	"	96OMC-4住一拵	
4		"	"	96OMC-1住(2)	

3号、4号の各住居址から出土したものである。

27は平仮名の「い」が漢字の一部分と思われる。53は「大●」で、下の字は割れていて判読できない。

3軒の住居址から出土したものであるが、いずれからも同一の墨書文字が複数あることは注目すべき点である。いずれの住居址も一部分のみの発掘であったが、比較的多くの墨書土器が出土していることは、これらの住居址が重要度の高い施設であったことが考えられる。土器編年上からはこれら3軒は、ほぼ同時期のものとされたが、同一文字の墨書土器があったことから、この見解は支持される。

6. 弥生時代およびその他の遺物

弥生時代の土器が4点、単独で小さな破片で出土している。いずれも赤褐色の薄手の土器で、焼成は良好である。外面は櫛形波状文がつけられ、内面は横方向のミガキがおこなわれている。

また、江戸時代の寛永通宝2点と不明の銭貨1点が出土している。

7. 大道下遺跡第4次調査の結果

大道下遺跡ではこれまでの3次にわたる調査で、湧水池をめぐるまわりの丘陵地から、旧石器時代、縄文時代、平安時代の遺物や遺構が確認されている。今回の調査で、遺跡ではないと思われていた湧水池のまわりの低湿地と丘陵東端の急斜面から大量の遺物が発見され、大道下遺跡がかなり大きな広がりをもつ遺跡であることが確認された。しかし、この遺跡範囲の大部分は、調査によって記録が残されたとはいえ、大きな開発事業によってほぼ消滅してしまったことは、残念なことである。

湧水池から流れ出る小川に沿った低湿地からは、縄文時代早期のまとまった土器が出土した。とりわけ押型文土器の前半期から後半期にわたる土器は、1次・3次調査でも確認されていたものであるが、北信地方における押型文土器研究にとって、一括性の高い重要な土器群を提供したものと見える。後半期のものは、密接施文の楕円文を中心に、異形の押型文が多くえられており、形式設定されたにもかかわらず全般が未解明であった壺ノ神遺跡の土器と同時期のものと考えられる。壺ノ神遺跡は同じ信濃町の古間地区の舟岳にあり、大道下遺跡より東へわずか約2.5kmの位置にある。押型文土器の末期の土器編年を再検討する上で、大道下遺跡第4次調査の資料は欠かせないものとなる

と思われる。

大道下遺跡の縄文早期土器でもう1つ特筆されるものは、沈線文系の土器の一群である。最近、長野県でも注目されてきた土器で、沈線文系の中では最も新しい段階に属するものと考えられる。山ノ内町の上林中道南遺跡の土器に近いものがあり、今後、早期の土器編年を考える上で空白をうめる一資料となるものである。押型文土器の末期の一群とあわせて、どちらも縄文時代早期の中ごろのかなり近い時期のものと考えられる。

信濃町の縄文時代遺跡の調査は、近年かなり増えてきたが、早期から前期のものが大半である。中でも早期の遺跡が多く、この時期の研究にとって信濃町の資料は重要なものが多くみられる。とくに押型文土器の遺跡に特筆すべきものがみられる。

また、平安時代の4軒の住居址が発掘され、9世紀後半の土器が出土した。3軒の住居址は国道沿いの丘陵の西端につくられていたので、雨水による浸食によって住居址はかなり破壊を受けていた。そのため復元できる土器は多くなかったが、それでも多くの土器片があったことから当初はかなりの遺物が含まれていたものと推定される。下の低地にあった4号住居址も浸食によって床面の一部が確認できただけである。

4軒の住居址から出土した土器は、須恵器、軟質須恵器、そして黒色土器をほぼ等量含み、焼きの強い軟質須恵器を多く含むことから、長野県教育委員会(1990)の編年の8期、すなわち9世紀後半の西暦870～900ごろの平安時代前期のものと推定された。信濃町の平安時代遺跡では、仲町遺跡の1・2号住居址(野尻湖人類考古グループ、1993)と大道下遺跡第2次調査(1990;上越商會地点、未報告)の住居址とならんで最も古い段階の資料である。

信濃町の遺跡は、旧石器時代から縄文時代前期までかなり濃密にその分布がみられるが、中期以降になると遺跡がきわめて減少し、人口が少なかったことが考えられる。平安時代の9世紀後半になると、ふたたび遺跡がみられるようになり、とくに10世紀になると遺跡の数が多くなる。このようにみえると、今回確認された平安時代の住居址は、農耕経済になってからはじめて信濃町のような山間部にも、人が多く住むことができるようになった歴史的な背景をもっていると考えることができる。

大道下という遺跡名は、字名の「大道下」に基づいている。ほぼ現在の国道の位置に南北に江戸時代の北国街道があったが、大道下はそれより下の西側で、上

の東側は「大道上」という字になっている。第2次調査の平安時代住居址は、大道上が一番西側に位置している。この2つの字名は、江戸時代より以前の古代の東山道に由来するものである可能性もある。大道下遺跡をはじめ、おなじく穂波地区にある丸谷地遺跡、古間地区の一里塚遺跡など平安時代の集落の遺跡がこの付近に多く分布することから、野尻湖の近くにあったとされる「沼辺駅（ぬのへのうまや）」と牟礼村の小玉地区をむすぶ間のルートとして、この大道下遺跡の近くをほぼ北園街道の位置に一致して東山道が通っていたと考えられる。

III 日向林B遺跡

1. 発掘の概要

日向林B遺跡は信濃町の古間地区の大字高濃の水穴集落の西側の丘陵に位置する。平成5年から7年にかけて上信越自動車道の新設、平成6年度に個人住宅の建設で発掘調査がおこなわれている。

今回の調査地は高速道より南側で、櫻橋氏住宅地点のすぐ北側に位置する。竹内健二氏が住宅を建設することになり、平成8年10月16日より25日まで発掘がおこなわれた。発掘調査は木造住宅の基礎を掘る位置を中心に、手掘りで掘削した。

2. 発掘地の地形・地質と遺物の出土状況

竹内氏住宅地点は、県道水穴・古間(傍)線の西側の丘陵の頂部にあり、標高651m付近にある。畑地となっていた場所である。

発掘地付近には、厚いローム層が分布しており、後期更新世の神山ローム層、野尻ローム層、および完新世の柏原黒色火山灰層がすべて風成層で分布しているので、古くから安定した高台にあったことがわかる。発掘地の遺物包含層は、すべて最上位の柏原黒色火山灰層である。

今回の調査では、77点の遺物が出土した。縄文時代の土器・石器、平安時代の土器などであり、遺物は散在し、遺構は確認されなかった。

3. 出土遺物

1) 縄文土器

出土した土器の総数は43点である。縄文時代の早期、前期、後期のものである。

早期末・条痕文土器：

1・2は条痕文土器である。表裏両面に条痕がつけられている。褐色で、胎土には著しく繊維を含む。器壁は9~10mmと厚手である。

前期中葉・羽状縄文土器

3・4は羽状縄文土器である。単節RLの原体を用いている。褐色で、胎土には濃褐色の細礫を多く含み、器壁は7~8mmである。

後期・無文土器

5~10は粗製の無文土器である。10の底部には網代圧痕がみられる。褐色で、器壁は7mmである。

2) 石器

石鏃

1・2は凹基の無茎石鏃である。1は黒曜石製、2は球質頁岩製である。

二次加工のある剃片

3は黒曜石製の縦長剃片の先端部に微細な刺離痕のあるものである。石器の一部分であると思われるが、器種は不明である。

4. 成果

日向林B遺跡竹内氏住宅地点の発掘調査では、おもに縄文時代の出土品がえられた。早期・前期と後期の土器があったが、量的には限られていて、また一括性の乏しいものであった。今回は発掘面積が少なかったこともあり、この地点の考古学的な性格を十分反映したものではないかもしれないが、遺跡の中心部からは少し離れていたと判断できる。

近くの櫻橋氏住宅地点では、縄文時代早期末条痕文系土器、前期中葉の黒浜式併行の土器および後半の諸磯A式の土器などが集中分布し、また中世の集団墓地が確認されている。

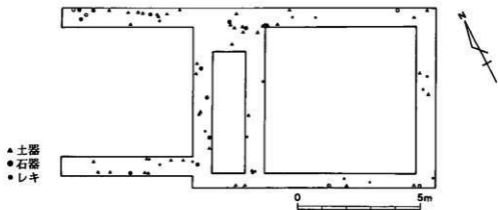
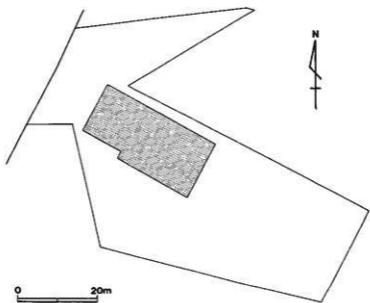
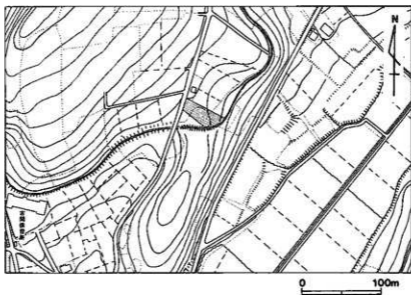


図38 日向林B遺跡の位置と遺物分布図

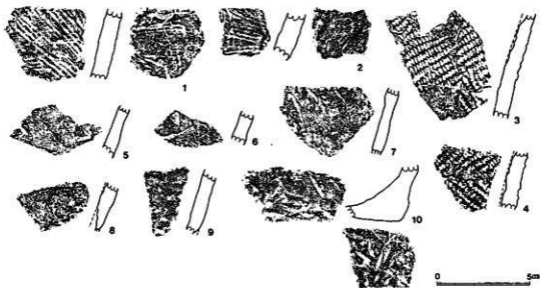


図39 日向林B遺跡（竹内氏住宅地点）出土の縄文土器

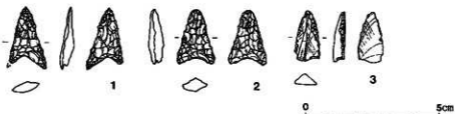


図40 日向林B遺跡（竹内市住宅地点）出土の縄文時代石器

表13 日向林B遺跡出土の縄文土器一覧

No.	時期	文様・ 文様要素	文様要素	機能	遺物番号	備考
1	早期末	条痕文系	条痕文	多	96HB-T42	
2	"	"	"	"	96HB-T23	
3	前期・中期 (品派移行)	羽状縄文	半節		96HB-T9(2), 96HB-T10	
4	"	"	"		96HB-T7	3, 4は同一個体
5	後期	無文			96HB-T8	
6	"	"			96HB-T37	
7	"	"			96HB-T15	
8	"	"			96HB-T57	
9	"	"			96HB-T19	5~10は同一個体?
10	"	"	網代圧痕(底部)		96HB-T13	底部

表14 日向林B遺跡出土の石器一覧

単位: cm, g

No.	名称	石材	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	石	黒曜石	96HB-T56	2.4	1.3	0.4	0.6	
2	"	緑質頁石	96HB-T55	2.0	1.3	0.5	1.0	
3	二次加工のある剥片	黒曜石	96HB-T67	1.9	1.0	0.4	0.6	

IV 町内における試掘調査

1. 杉久保遺跡

1) 調査の概要

杉久保遺跡は信濃町野尻地区の野尻湖北岸に位置する。遺跡の中心部は、現在、町営駐車場のある湖岸付近である。昭和37年(1962)から40年(1965)にかけて学術調査がおこなわれ、41年(1966)年には町営駐車場の建設に先立って緊急調査がおこなわれたA地点は、駐車場の一番北側の警察官野尻湖臨時交番所のすぐ湖側の付近である。平成2年(1990)年には、駐車場の北東の水田に公衆トイレが建設されることになり緊急調査がおこなわれた。

県道古間(停)野尻線の北側にある池田心一氏住宅が建て替えられることになり、基礎工事とともに9月21日から23日、立合調査がおこなわれた。

2) 調査結果

基礎部分で深さ約0.8mから1.5mを調査した。この付近には完新世の柏原黒色火山灰層の下に後期更新世の風成の野尻ローム層が分布している。上部野尻湖層以上の地層からは、出土品はなかった。

2. 上ノ原遺跡(駐在所予定地)

1) 調査の概要

上ノ原遺跡は、信濃町の柏原地区の字上ノ原から上町にかけて位置する。遺跡の最南端にあたる住宅地で駐在所が建て替えられることになり、11月26・27日に、

その予定地を手掘りして試掘調査した。

2) 調査結果

この付近は完新世の柏原黒色火山灰層の下に、後期更新世の風成の野尻ローム層が分布している。調査地では、中部野尻ローム層の上面まで発掘したが、遺物は一切確認できなかった。このため、この地点は遺跡の中心部からははずれていることが判明した。

3. 上ノ原遺跡(町道予定地)

1) 調査の概要

上ノ原遺跡の北端にあたる大久保池に近いところで、町道の建設の予定ができ、遺跡範囲に含まれるかどうかの確認が必要になった。そこで、11月27-29日に、その予定地を手掘りして試掘調査した。

2) 調査結果

この付近は完新世の柏原黒色火山灰層の下に、後期更新世の風成の野尻ローム層が分布している。調査地で上部野尻ローム層の最上層まで発掘したところ、剥片2点が発見された。

ところが、あいにく急に大量の降雹にみまわれ、試掘調査を続行することができなくなったので、遺物は現地に残り、調査も次年度に繰り越すこととした。遺物があったことで、遺跡の範囲が従来の分布より北側まで拡大することが判明したが、遺跡の詳細な範囲とその規模については不明な点が多く、問題点として残された。

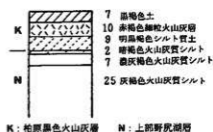


図42 杉久保遺跡の地質

図41 杉久保遺跡立合調査地点



図43 上ノ原遺跡試験場位置図

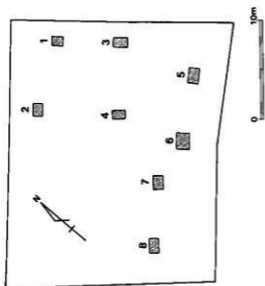


図44 上ノ原遺跡試験場グリッド

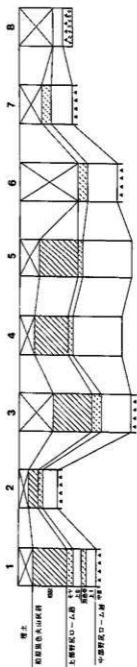


図45 上ノ原遺跡試験場調査地の地質

V まとめ

平成8年度の大道下遺跡をはじめとする信濃町内の遺跡発掘では、以下の点が明らかとなった。

1) 大道下遺跡は、町内の富士里地区にあり、埋め立て予定地となったので、試掘調査をおこなった。その結果、3か所の遺物密集地が確認できた。丘陵端部にあたるA区からは、平安時代の住居址3軒が検出された。丘陵斜面のB区では、大量の平安時代遺物が散布していたが、遺構は確認されなかった。湧水池と周辺の低窪地のC区には、平安時代住居址1軒と縄文時代早期の土器密集地が確認された。今回の発掘地は、一般的には遺跡のないところと思われる場所であり、このような所から大量の遺物が出土したことは、今後の遺跡保護の上で一石を投じるものとなった。

2) 大道下遺跡の縄文時代の遺物では、早期の押型土器が前半期のもので後半期のもものが多くあったが、とくに押型文末期の良好な一括性のある土器群がえられた。また、ほぼ近い時期の沈線文承土器の一群が出土した。いづれも、縄文早期の土器編年上、重要な資料である。

3) また、大道下遺跡の平安時代の住居址は、ほぼ同一時期のもので、9世紀後半のもので、信濃町の古代遺跡としては初期の段階のものとしてとらえられる。住居内からは、「石井」などと判読できる墨書土器が9点出土した。

4) 古間地区の日向林B遺跡の調査地は、個人住宅関連で、遺物は出土したものの、遺跡の中心部からは離れたところの可能性が大きい。

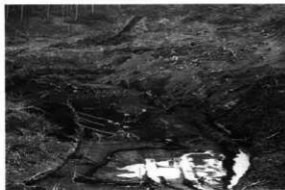
5) 野尻地区の杉久保遺跡、柏原地区の上ノ原遺跡などでは、開発予定地の試掘調査をおこなった。上ノ原遺跡の町道予定地で、旧石器時代の遺物を確認し、遺跡範囲が拡大することが判明した。これ以外の地点では、出土品はなかった。

引用・参考文献

- 会田 進 (1988) 中部山岳地方押型文文化の様相、長野県を中心に。手塚山考古学研究所編、「縄文早期を考える、押型文文化の諸問題」、344～374P。
- 麻生 優・白石浩之 (1986) 縄文土器の知識、1。考古学シリーズ、14、東京美術、165P。
- 岡本東三 (1983) トロトロ石器考、麻生優編「人間・遺跡・遺物」119～145。
- 片岡 肇 (1988) 異形押型文土器について、京都文化博物館(仮称)研究紀要、第1集、97～119P。
- 亀井節夫編 (1963) 湖底を掘る一野尻湖の調査と発掘、科学の実験、14、707～737。
- 小林秀夫 (1981) 長野県中央道祖蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その3。長野県教育委員会。
- 笠沢 浩・小林 孚 (1966) 長野県上水内郡信濃町塞ノ神遺跡出土の押型文土器、信濃、18、4号、265～272P。
- 塚原長則ほか編 (1996) 上林中道南遺跡Ⅲ、山ノ内町教育委員会、144P。
- 戸沢充則 (1978) 押型文土器群編年研究案。『中部高地の考古学』、長野県考古学会、65～82P。
- 戸沢充則・会田 進編 (1987) 穂沢押型文遺跡調査研究報告書、岡谷市教育委員会、216P。
- 中村由克 (1988) 柏原の原始をさぐる。長野県上水内郡信濃町「柏原町区誌」117～145P。
- 中村由克・中村敦子 (1994) 丸谷地遺跡・大道下遺跡発掘調査報告書、平安時代住居址・押型文土器の遺跡、信濃町教育委員会、78P。
- 長野県教育委員会 (1990) 松本市内その1、総論編。中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4。
- 長野県考古学会縄文時代(早期)部会編 (1997) 「シンポジウム押型文と沈線文」229P。
- 野尻湖人類考古グループ (1993) 仲町遺跡 第6回陸上発掘の考古学的成果、野尻湖博物館研究報告、1、113～166P。
- 林 茂樹ほか (1970) 杉久保A遺跡緊急発掘調査報告一長野県上水内郡信濃町野尻湖底、長野県考古学会誌、8、1～18。
- 松沢亜生 (1957) 細久保遺跡の押型文土器、石器時代、4。



1 大道下遺跡 南側より



2 大道下遺跡 低地 (C区)



3 C区の発掘



4 C区の発掘



5 C区 遺物の出土状況



6 大道下遺跡 斜面部 (B区) と丘陵部 (A区)



7 A区 北側より 1号住居址



8 A区 3号住居址 遺物出土状況



9 A区 3号住居址



10 C区 4号住居址



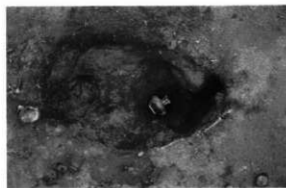
11 大道下遺跡 A区 1号住居址の全景



12 1号住居址の発掘



13 1号住居址の記録



14 1号住居址ピット



15 ピット内の須恵器・壺



16 大道下遺跡 斜面部 (B区) の発掘



17 大道下遺跡の調査スナップ



18 大道下遺跡 C区の記録



19 大道下遺跡の調査スナップ



20 日向林B遺跡の発掘



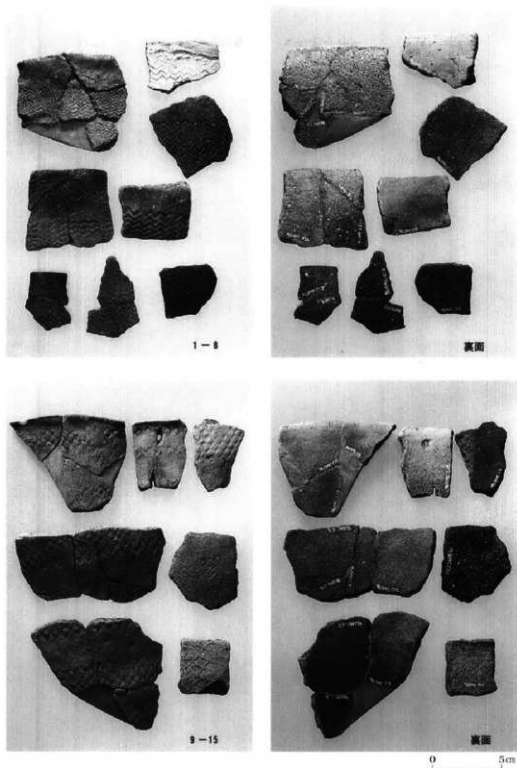
21 日向林B遺跡の層位



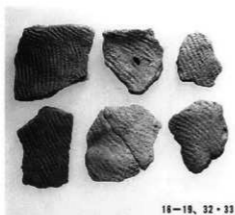
22 上ノ原遺跡・駐在所予定地の試掘



23 駐在所予定地の試掘



大道下遺跡の縄文土器 1 早期・押型土器 山形文・帯状 (1-8)、精円文・帯状 (9-13)、格子目文 (14・15)

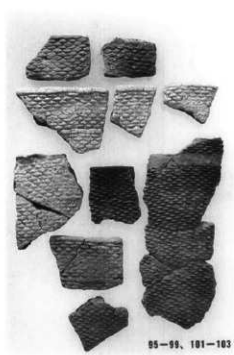
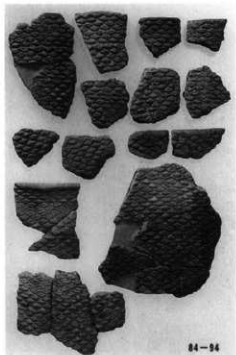
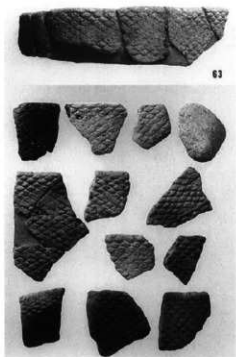


0 5cm

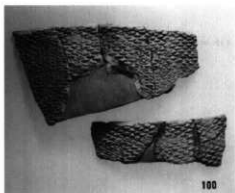
大道下遺跡の縄文土器 2 早期土器 表裏縄文 (16-19)、縄文 (32-33)、器糸文 (20-31)、押型文山影文 (41-47)



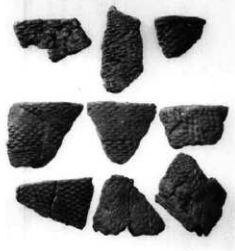
大道下遺跡の縄文土器 3 早期・押型土器 山形文 (34-40)、栞円文 (48-62)



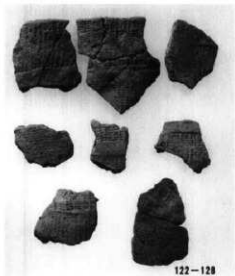
大道下遺跡の縄文土器 4 早期・押型土器 横門文 (64-99、101-103)



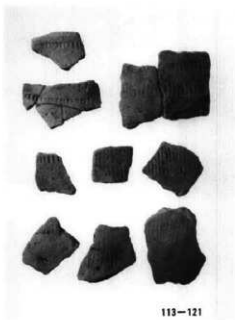
100



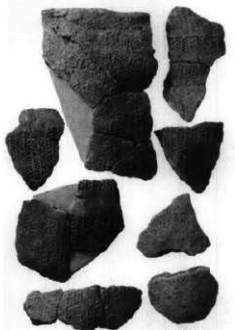
104-112



122-128



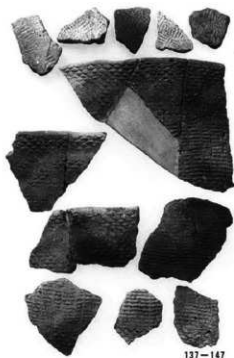
113-121



129-136

0 5cm

大道下遺跡の縄文土器 5 早期・押型土器
 格子文 (100、104-112)、縞状文 (113-121)、特殊な格子目文 (122-128)、綾杉状文 (129-136)



137-147



148-158



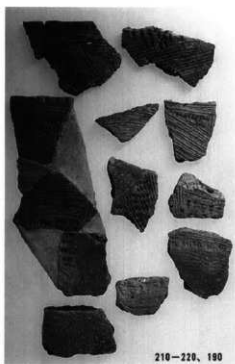
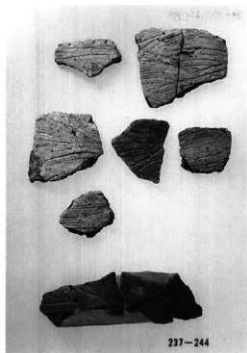
159-168



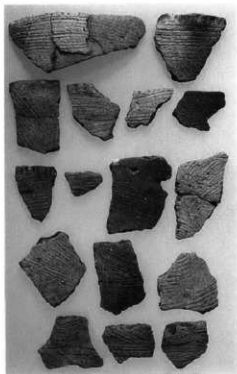
169-185

0 5cm

大道下遺跡の縄文土器 6 早期・押型文土器、無文土器
特殊押型文 (137-141)、異種文様並列 (142-168)、無文土器 (169-185)



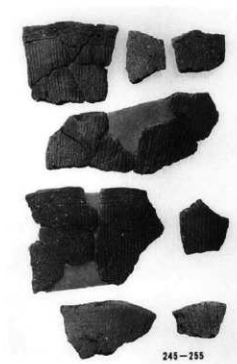
大道下遺跡の縄文土器 7 早期・沈線文系土器 (a)237-244, (b)191-209, (c)210-220, 190



221-236



裏面



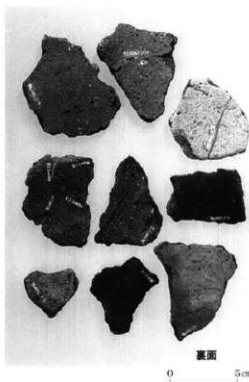
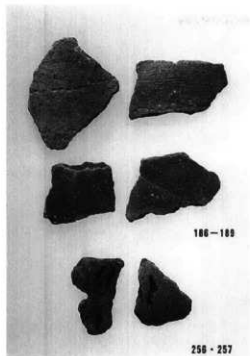
245-255



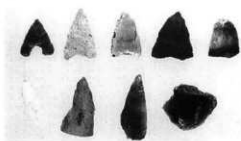
裏面

0 5cm

大道下遺跡の縄文土器8 早期・沈線文系土器 (d)221-236、(e)245-255



大道下遺跡の縄文土器9 早期・沈線文系土器 (r)186-189、条痕文系土器256・257、前期土器258-274



1-9

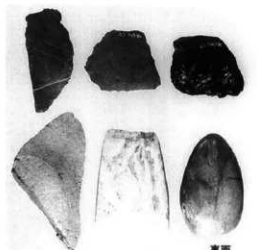


裏面

0 5cm



10-15



裏面

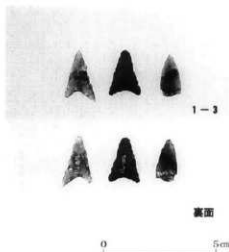
0 5cm

大道下遺跡の縄文時代の石器1



1-10

0 5cm

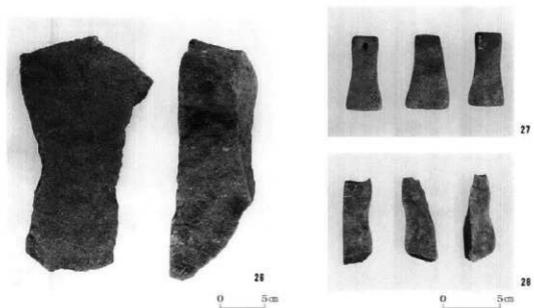
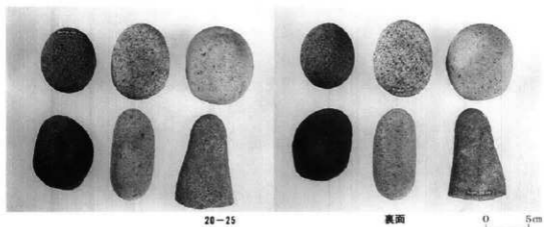
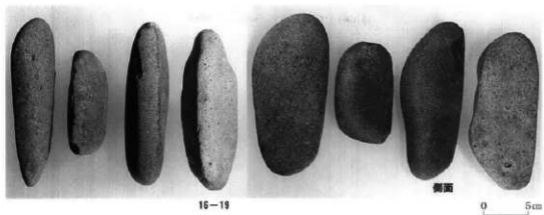


1-3

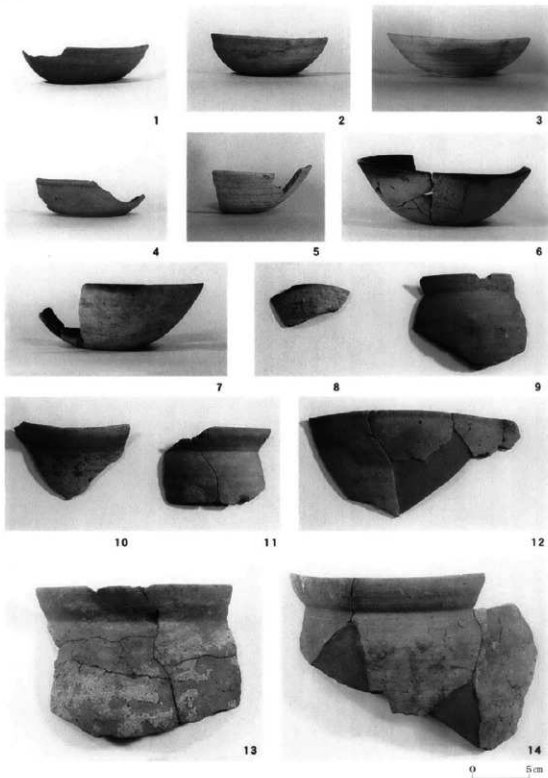
裏面

0 5cm

日向林B遺跡の縄文土器と石器



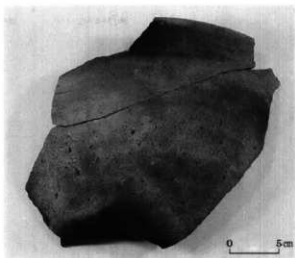
大道下遺跡の縄文時代の石器 2、時代未詳の砥石



大道下遺跡の平安時代の土器 1 1号住居址1-14



15



17



16



19



18



20



21



22



24



25



23



0 5cm

大道下遺跡の平安時代の土器 2 1号住居址15-19、3号住居址20-25



26



27



28



29



32



30



31



33



34



35



36

0 5cm

大道下遺跡の平安時代の土器 3 3号住居址26-36

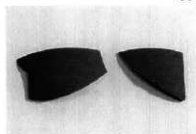


39



37

38



40



41

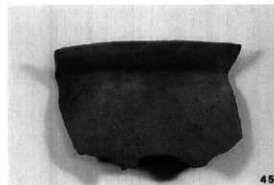
42



44



43



45



46



0 5cm

大道下遺跡の平安時代の土器 4 4号住居址37-46



47

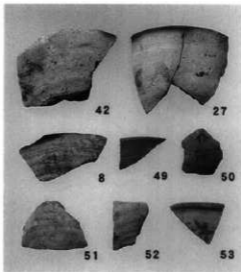


48



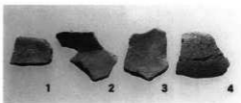
39

39-47-48 0 5cm



0 5cm

大道下遺跡の平安時代の土器 5
4号住居址47・48
墨書土器 中段
弥生時代の土器 下段



0 5cm

VI 東裏遺跡（バスストップ地点）

1. 調査に至る経緯

平成9年開通の計画で上信越自動車道建設が進められた中、その開通に合わせてように高速道の側道で信濃町が拡張する部分（町道役場大久保線）と町道バスストップ線、及びバスストップ駐車場の建設が計画された。そのため、平成8年の春から信濃町建設課と協議を重ね、町道役場大久保線の拡張部分については、隣接地を調査した長野県歴史文化財センターの調査結果から遺跡が広がっていることが明らかであったため、信濃町の単独事業として発掘調査をおこなうこととし、

町道バスストップ線とバスストップ駐車場については遺跡地図上、遺跡の範囲外になっていたため、遺跡の有無を確認するための試掘調査を実施することにした。調査は町道拡張に伴う調査と一連で実施したため、調査期間は7月25日から10月29日という長期になったが、この中で実質20日程度をこの範囲の調査に当てた。

2. 調査日誌抄

7月25日（木）晴れ

駐車場予定地の草刈りをおこなう。

7月31日（水）曇り

町道バスストップ線に試掘用トレンチを設定し、発掘を開始する。

8月1日（木）晴れのち曇り
駐車場予定地に試掘用トレンチを設定し、発掘を開始する。

9月6日（金）曇り
町道バスストップ線及び駐車場予定地のトレンチの発掘を終了する。

10月29日（火）晴れ
町道バスストップ線及び駐車場予定地の記録、及び撤収を完了する。

3. 調査の方法

町道バスストップ線建設予定地の調査前の状況は、軽自動車一台が通れる程度の無舗装の道路で、調査地よりも更に奥の畑へ行くための道路として使用されていた。調査時にもその道路は使用されていたため現道部分は避け、拡張する部分について1m×3mを基本にトレンチを設定して発掘し、遺物が確認された場合に拡張するという方法をとることにした。設定したトレンチは10ヶ所である（図48）。

駐車場の予定地は荒蕪地となっていて、その中に1m幅



図46 東裏遺跡（バスストップ地点）調査地の位置

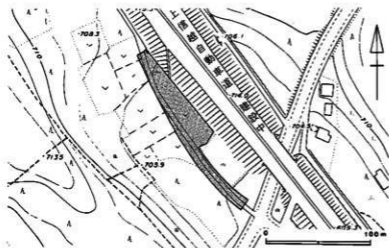


図47 東裏遺跡（バスストップ地点）調査地と周辺の地形

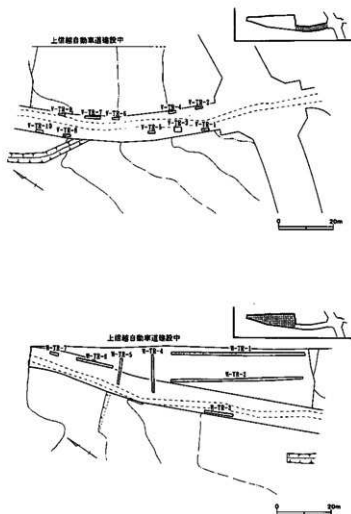


図48 試掘トレンチの位置

のトレンチを7ヵ所設置した(図48)。2つの地点の調査対象面積は合わせて約1500㎡で実際に試掘調査をおこなった面積は158㎡である。なお、調査区域の呼称は、町道役場大久保線の調査と一体でおこなってきた経緯から、役場大久保線の調査区を南からⅠ～Ⅳ区、町道バスストップ線の地点をⅤ区、駐車場予定地の地点をⅥ区とした。よって、ここではⅤ区とⅥ区の調査成果のみを掲載する。

発掘はすべて手掘りでおこなった。草が生えている表土部分のみスコップを使用した。その下は移植ゴテと草かき鎌を使用して掘り下げた。

4. 発掘地の地形と層序

発掘地は東裏遺跡の北端の延長上にあり、西側の丘

陵地には上ノ原遺跡、東側の丘陵地には大久保南遺跡がある(図46)。地形的にはこのあたりで最も低い場所になり、調査地内では北から南に向かって緩やかに傾斜している(図47)。

層序は図49、50に示した。周囲に比べ低い場所であることから、この地域で柏原黒色火山灰層と呼ばれる黒ボク土(Ⅱ層)が厚く堆積している。色の違いによって分けられる地点についてはⅡa～Ⅱdに細分した。遺物は旧石器時代から近世のものまで、すべてこのⅡ層の中から出土した。Ⅳ層は褐色がかかった粘土質の層で、Ⅲ層はⅡ層とⅣ層の漸移層である。Ⅲ層とⅣ層も色の違いで細分した。Ⅲ層、Ⅳ層は完全な風成層の地層と比べると不鮮明であることから、水のたまりやすい地域で、水の影響を受けやすい地層であることがうかがえる。なお、Ⅲ層、Ⅳ層から遺物は出土しなかった。

5. 遺物の出土状況

調査区内から遺構は検出できなかった。遺物の分布はまとまりが見られず、平面的には散漫な出土状況であった。また、垂直分布についても面的には出土せず、遺物間の位置に大きな上下の差が見られた。このような出土状況と遺構が検出できなかったことなどから遺物の現地性は低いと判断し、遺物はトレンチごと一括で取り上げることにした。

6. 出土遺物(図51)

遺物はトレンチごと一括で取り上げ、総点数は約60点であった。

1は無班品質安山岩製の石刃を素材にしたナイフ形石器である。先端及び基部の左側縁が欠損する。素材の打面側を基部に用い、右側縁先端と基部にそれぞれブランティングが施されている。右側縁の腹面には、背面のブランティングに先行する一回の平坦剥離が施されている。基部の左側縁が欠損のため不明だが、そこにブランティングが施されていれば、杉久保型ナイフ形石器と言える資料である。2は珪質凝灰岩製のクサビ形石器である。縦長刺片を剥離した残骸を素材と

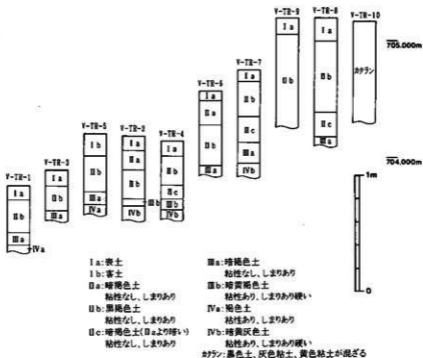


図50 V区の土層柱状図

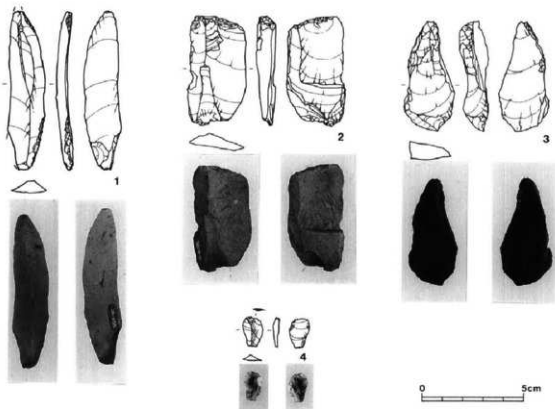
表15 主な出土遺物一覧(石器)

番号	名称	石材	遺物番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(mg)	備考
1	ナイフ形石器	An	V-TR7	7.7	1.7	0.5	7.3	杉久保型?
2	クサビ形石器	Sh	VI-TR1	5.2	2.9	0.9	12.4	
3	剥片	An	VI-TR1	5.2	2.4	1.5	13.8	
4	剥片	Ob	V-TR2	1.5	1.0	0.3	0.3	微細剥離痕有

石材凡例—An…無斑品質安山岩、Sh…珪質凝灰岩、Ob…黒曜石

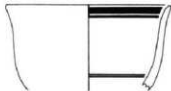
表16 主な出土遺物一覧(土器)

番号	種類	器種	遺物番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	備考
5	黒色土器	碗	VI-TR1	—	8.4	1.7	1/6	
6	磁器(染付)	皿	VI-TR1	—	4.4	2.5	1/4	
7	磁器(染付)	碗	VI-TR1	7.5	—	4.9	1/5	



6

图51 主女出土遺物



7

0 5cm

しており、上下両端には両極剥離による剥離痕が見られる。3は無斑品質安山岩製の剥片で、左側面に自然面を残す。4は黒曜石製の縦長剥片で、打面側に微細な剥離痕が認められる。これらは後期旧石器時代の所産と考えられる。

5は黒色土器の底部で、平安時代の所産と考えられる。6、7は染付の磁器で、18世紀後半から19世紀の中頃に製造されたものと考えられる。

7. まとめ

遺跡の広がりの有無を調べるため、町道バスストップ線部分に10ヶ所、駐車場予定地部分に7ヶ所のトレンチを設定し、試掘調査を実施した。遺構は検出されず、遺物はII層の中から約60点が出土した。旧石器時代から近世までの遺物が散漫に出土する状況から、現地性が低いと判断し、遺構がないことを考え合わせ、本調査の必要はないと判断した。

Ⅶ 東裏遺跡（個人住宅地点）

1. 調査に至る経緯

平成8年7月17日に個人住宅の施工業者の照会を受け、埋蔵文化財の保護協議をおこなった。建設予定地の北側はかつて大規模に発掘調査を実施した場所であったため、今回の住宅建設予定地まで遺跡が広がっている可能性が高いと考えられ、整地及び基礎工事で掘削する地点のみ発掘調査が必要と判断し、施主の協力を得て、発掘調査を実施する運びとなった。

2. 調査日誌抄

- 7月23日（火）曇りのち雨
基礎工事予定地を発掘開始。
- 7月25日（木）晴れ
遺物が多数出土したことから、整地で掘削を予定している範囲まで調査地を拡張する。
- 8月1日（木）曇り
遺物出土状況の写真撮影。
- 8月5日（月）曇り
平面図作成。遺物の取り上げ。撤収。

3. 調査の方法

個人住宅建設に係る発掘調査であることから、調査箇所は工事で掘削する範囲のみとし、発掘の深度も基礎工事によって掘削を予定している深さまでとした。調査の当初は遺跡の状況確認を兼ね、基礎工事で掘削を予定している箇所を約60cm幅で発掘した。この時に遺物がまとまって出土した地点（調査地の北西側）は整地で掘削が予定されていたため、調査範囲を拡張して面的な調査をおこなった。

発掘は移植ゴテと草かき鎌を用い、すべて手掘りでおこなった。

4. 発掘地の地形と層序

発掘地は丘陵地の北から南へ下る傾斜地の途中に位置している。東側および南側は畑地が広がっている（図52、53）。北側に特別養老老人ホームおらが庵があるが、この施設を建設する際に発掘調査が実施され、旧石器時代と縄文時代を中心とした遺跡の広がりか確認されている（未報告）。基本層序はI層が表土、II層は暗褐色土と暗黄褐色土が混ざっており、埋めた土で



図52 東裏遺跡（個人住宅地点）調査地の位置



図53 東裏遺跡（個人住宅地点）調査地と周辺の地形

ある可能性が高い。III層は黄灰色のシルト質の土で、水の影響を受けながら堆積したと思われる(図54)。遺物はIII層上面とII層中から出土している。

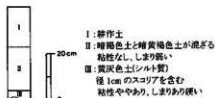


図54 調査地の基本層序

5. 遺構と遺物の出土状況

調査地の北西側で10cm前後のおずかな段差による方形の遺構の一角を検出した(図55)。この段差の内

部(一段低い側)は平坦になっていて、西側で小さなビットを1基のみ検出した。また、この段差の外側では外形の直径が約60cm、底面の直径が約30cmのビットを1基検出した。いずれも用途は不明である。遺物はほとんどがこの段差の内部から出土している(図56)。遺物はファイゴの羽口、鉄滓など鍛冶仕事に関係するものと陶磁器類であることから、鍛冶場の遺構という見方ができるかもしれないが、火を使用した痕跡がほとんど残っていないことなどから、鍛冶場とは断定していない。

6. 出土遺物(図57、58)

出土した遺物は194点である。内訳はファイゴの羽口が49点、磁器66点、陶器22点、鉄滓23点、礫10点、古銭1点、その他23点である。

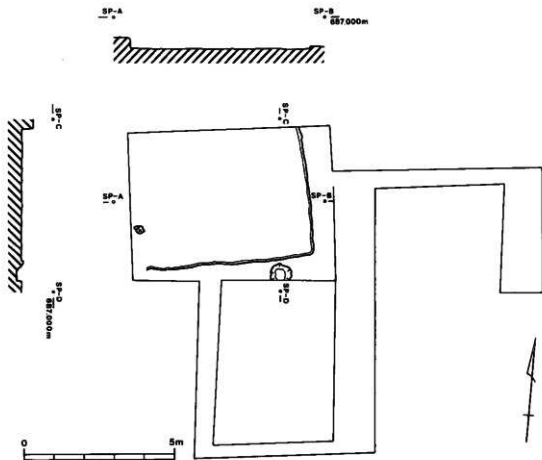


図55 遺構の検出状況

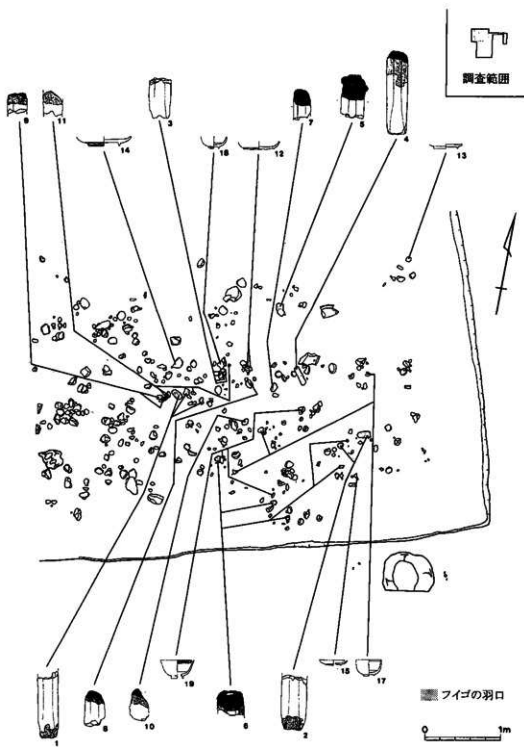


図56 遺物の出土状況（番号は実測図の番号に対応）

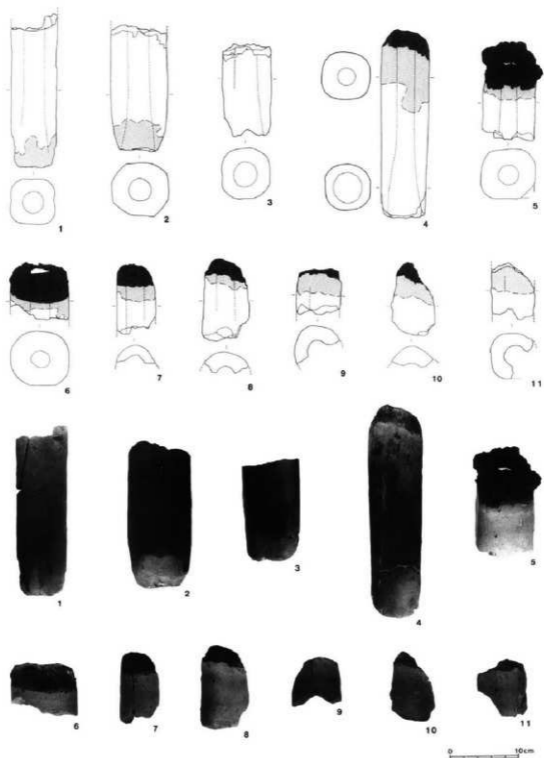
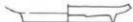


図57 主な出土遺物（ワイゴの羽口）



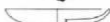
12



13



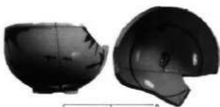
14



15



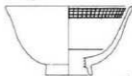
16



17



18



19



图58 主女出土遺物（磁器）

表17 主な出土遺物一覧 (フィゴの羽口)

番号	遺存部分	遺物番号	外径 (cm)	内径 (cm)	重量 (g)	外形	色 調	胎土 含有物	植物 繊維痕	備 考
1	フィゴ側	27,31,144	6.7	3.1	630	方形	胴部にぶい黄橙色 フィゴ側端部灰白色	シロ、アカ、 石英、角	有	
2	フィゴ側	100,104	8.5	3.4	1190	八角形	胴部灰黄褐色 フィゴ側端部にぶい橙色	シロ、アカ、 石英、角	有	
3	フィゴ側	49,50,51,181	7.3	3.3	520	方形	胴部灰褐色と にぶい橙色が混在	シロ、アカ、 石英、角	有	
4	完形	109	7.1	2.6	1220	完形	胴部灰黄褐色 炉側にぶい黄褐色	シロ、アカ、 石英、角	有	炉側端部は黒色のガラス 質部をもつ
5	炉側	42	8.0	3.0	660	方形	胴部にぶい黄褐色 炉側黄褐色	シロ、アカ、 石英、角	有	鉄滓と結合し、気泡のある 黒色ガラス質部をもつ
6	炉側	76,85,96,101,169	8.7	2.9	410	円形	胴部浅黄褐色	アカ、石英、 角	有	気泡のある黒色ガラス質部 をもつ
7	炉側	60	-	-	210	円形	胴部外面浅黄褐色 胴部内面黄褐色	シロ、アカ、 石英、角	有	気泡のある黒色ガラス質部 をもつ
8	炉側	58	-	-	140	円形?	胴部外面浅黄褐色 胴部内面浅黄褐色	シロ、アカ、 石英、角	有	気泡のある黒色ガラス質部 をもつ
9	炉側	33,151	7.2	-	140	方形	胴部橙色 炉側端部灰白色	シロ、アカ、 石英、角	有	気泡のある黒色ガラス質部 をもつ
10	炉側	63	-	-	150	方形	胴部浅黄褐色 炉側端部灰白色	シロ、アカ、 石英、角	有	炉側端部は被熱により灰 色に変色
11	胴部	30,48,152,153	6.5	3.2	140	方形	胴部灰褐色 胴部炉側にぶい黄褐色	シロ、アカ、 石英、角	有	炉側端部は被熱により灰 色に変色

凡例-シロ…シロ岩片、アカ…アカ岩片、石英…石英、角…角閃石

表18 主な出土遺物一覧 (磁器)

番号	器種	遺物番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	備 考
12	皿	54,55	-	10.1	2.7	1/3	蛇の目図形高台
13	皿	111	-	7.8	1.6	1/2	蛇の目図形高台
14	皿	34	-	10.3	3.2	1/4	
15	皿	92	9.1	4.9	1.6	1/4	
16	蓋	表探	-	4.6	2.4	1/2	
17	碗	67,118,159	8.3	3.7	5.3	2/3	半円形 見込有
18	碗	47	-	3.5	4.0	1/2	半円形 見込有
19	碗	75,84,105	11.0	4.0	6.0	2/3	楕円形

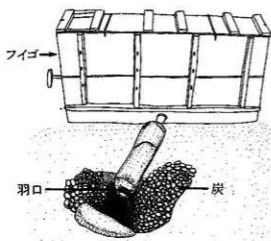


図59 フイゴと羽口の関係

フイゴ（籾）の羽口は、フイゴから炉（火床）へ空気を送り込む時の送風管で、素焼きの土器である。信濃町に残る鍛冶場の例を参考にすれば図59のように設置されているものである。炉に面した羽口の末端部は高温になるが、冷めるとその末端部気泡のあるガラス質の部分と鉄とが付着する。5は特に付着物が厚く、かなり使い込まれていることがうかがえる。羽口の断面の形状を見ると、円形のほかに角を丸くした方形のもの、角を面取りしたために八角形をしているものがある。また、すべてのものに植物の繊維痕が観察されることから、製作の際に混和材として植物繊維を混入したことがうかがえる。個別の観察内容は表17に示した。これらが使用された時期については、羽口の形状等からは推定できないが、共伴する磁器の年代等から19世紀と考えておきたい。

磁器（染付）は主なものを図化し、その特徴は表18に示した。胎土や器形などから多くが伊万里焼と考えられ、製造時期が18世紀後半から19世紀中頃のものと考えられる。

7. まとめ

この遺跡の時期について考察する。ここでは図化をしていないが、磁器の中には型紙摺によって文様が付けられた近代の遺物も含まれている。出土した遺物は面的な広がりをもって、まとまって出土していることから、これらは一時期に埋まった可能性が高いと考えられる。こうしたことから、江戸時代の磁器を多く含

むものの、遺跡が形成された年代は19世紀後半としておきたい。

今回の調査により、江戸時代末から明治時代初めのころの鍛冶場に関する資料を多数得ることができた。信濃町は19世紀の初めから信州鎌の製造がさかんになり、以来、信州打刃物の産地として今もその産業が受け継がれている。今回の調査では、この地域特有の歴史的特徴を示す資料を得ることができたことが大きな成果と言えるだろう。



1 東真遺跡(バスストップ駐車場)の調査風景



2 東真遺跡(バスストップ駐車場)の遺物出土状況



3 東真遺跡(個人住宅)の発掘風景(調査開始時)



4 東真遺跡(個人住宅)の発掘風景(完了時の清掃)



5 東真遺跡(個人住宅)の遺物出土状況(遠景)



6 東真遺跡(個人住宅)の遺物出土状況(近景)



7 東真遺跡(個人住宅)の遺物(フィブの羽口)



8 東真遺跡(個人住宅)の遺物(フィブの羽口と磁器)

報告書抄録

書名		大道下遺跡(4次)ほか信濃町内遺跡発掘調査報告書						
副書名		押型文土器と平安時代の遺跡						
シリーズ名		信濃町の埋蔵文化財						
シリーズ番号								
編著者名		中村 由克・渡辺 哲也						
編集機関		信濃町教育委員会						
所在地		〒389-13 長野県上水内郡信濃町柏原428-2 TEL: 026-255-5923						
発行年月日		西暦 1997年3月19日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おほみちの 大道下	ながの県上水内郡信濃町 大字穂波字大道下	205834	146	36度 47分 05秒	138度 13分 12秒	19960411~ 19960731	10,061	試掘調査
ひなたがけの 日向林B	ながの県上水内郡信濃町 大字富嶺字日向林	205834	105	36度 48分 00秒	138度 13分 57秒	19961016~ 19961025	103	個人住宅
すぎくま 杉久保	ながの県上水内郡信濃町 大字野尻字船場29-8	205834	29	36度 50分 03秒	138度 12分 52秒	19960921~ 19960923	約340	個人住宅
うしろの 上ノ原	ながの県上水内郡信濃町 大字柏原字上ノ原	205834	65	36度 48分 26秒	138度 12分 19秒	19961126~ 19961127	621	試掘調査
あづま 東裏 (ハーストフ地区)	ながの県上水内郡信濃町 大字柏原字東裏	205834	70	36度 48分 38秒	138度 12分 19秒	19960725~ 19961029	158	試掘調査
あづま 東裏 (個人住宅地点)	ながの県上水内郡信濃町 大字柏原字東裏	205834	70	36度 48分 18秒	138度 12分 30秒	19960723~ 19960805	150	個人住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大道下	散布地	縄文時代 早期 前期 弥生時代 平安時代 近世	住居址 4軒	総出土点数 縄文土器 石器 弥生土器 平安時代土器 銭貨	10,322点 2,405点 270点 4点 7,262点 3点	縄文時代早期の押型文・沈線文系土器期の遺跡で、沢ぞいに分布する。平安時代の4軒の住居址などから大量の土器が出土。急傾斜地に確認され、遺跡分布の上から特殊なケースがあることが判明した。		
日向林B	散布地	縄文時代		縄文土器 石器	43点 3点	縄文時代の遺物が確認されたが、遺跡の中心部からはずれていたと判断される。		
杉久保	散布地	旧石器時代 平安時代		出土品なし				
上ノ原	散布地	旧石器時代		出土品なし				
東裏 (ハーストフ地区)	散布地	旧石器時代 平安時代 近世		ナイフ形石器 磁器(染付)など60点				
東裏 (個人住宅地点)	散布地	近世 近代		ファイブの羽口 磁器(染付)など194点		鍛冶場に関係する遺物が多数出土した。		

表紙写真

左上 押型文土器 楕円文と複合山形文の組み合わせ
(異種文様並列)

左下・右 沈線文系土器(c) 櫛歯状工具による条線と刺突
文

ともに縄文時代早期

信濃町の埋蔵文化財

大道下遺跡（4次）ほか信濃町内遺跡

発掘調査報告書

——押型文土器・平安時代の遺跡——

編集・発行 信濃町教育委員会
長野県上水内郡信濃町柏原428-2

1997年3月19日

印刷 信毎書籍印刷株式会社

【この報告書について連絡先】

野尻湖ナウマンゾウ博物館

〒389-13 長野県上水内郡信濃町野尻287-5

TEL 026(258)2090

FAX 026(258)3551

